
魔法少女リリカルなのは Z E C T

レイキャシール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ZECT

【Nコード】

N6972T

【作者名】

レイキャシール

【あらすじ】

『俺』はある日、猫を助けようとして交通事故に遭った。

そして目が覚めると、周囲には何も無い空間に、『俺』はいた。

「えっと、単刀直入に申し上げます。あなたは、死にました。」

「は！？死んだってドコト！？「生まれ変わって、新しい人生を歩むことができます。」

「ちよつとまでえい！！展開が急すぎて状況が……………」

「それでは、よい人生を。」

「せめて説明プリーズ……………！！」

魔法少女リリカルなのはZECT、始まります。

プロローグ：えっと・・・転生してみたいだ・・・

プロローグ：えっと、転生してみたいだ・・・。

「う・・・ここは・・・どこだ・・・？」

意識を覚醒させた青年は、起き上がって周りを見渡す。

周囲には何も無い、白一色。かと言って雪が降っているわけでも無し。

一言で言うなら“虚無”。それしか言いようがなかった。

「あら、気がつかれましたか？」

すると、やけに間延びした声が聞こえたと思うと、彼の目の前に変わった服装の女が現れた。

「えっと・・・どこのギリシャ神話だ、その格好？」

大きい白い布を体に巻いて服の代わりにしているのは間違いなく、古代地中海様式だろう。

「えっと、単刀直入に申し上げます。あなたは、死にました」

「聞いてねえのかよ・・・って、ええ！？死んだあ！？」

「はい」

女は間延びした声で答える。

「覚えてないんですか？子猫を助けようとして、トラックにはねられて、それで体中の骨という骨が折れて、関節という関節

が………」

「OK、その位にしてくれ。グロイのは苦手なんだ……」

「まあ、なんやかんやで、あなたは天に召されたのです」

「………」

「……驚かないんですか？」

「遅かれ速かれ、命つてのは散る。俺の場合、それが速かつただけだ」

「悟っているんですね、そのお年で」

「老けているの間違いじゃないか？それより、死んだ俺の前に現れたって事は、いよいよ地獄へ真つ逆さまか？」

「そうじゃありませんよ。神様審議会で、あなたは善人レベル5に認定されました。よって、生まれ変わって、別の世界で新しい人生を歩むことが出来ます。何処の世界がいいですか？」

「神様審議会ってなんだよ！胡散臭さがドライブイグニッションしているじゃねえか！」

「じゃあ、“リリカルなのは”の世界で決まりですね」

「ちよつと待てえい！！またパンピー人生は嫌だぞ！」

女、もとい女神（話の流れから察するに）を青年は全力で止める。

「もう、話は最後まで聞いて下さいよ。レベル5の特典として、好きな能力を五つまで得る事ができます」

「好きな能力を五つ？んじゃ………」

彼は顎に手をやって考え込む。そして、何か閃いたらしく、はっとしたように上を向いた。

「まず、俺に魔導師としての素養をくれ。ランクはSで良い」

「あれ、それで良いんですか？普通だったらSSSとか、チート級のレアスキルとか、ぶっ飛んだ注文を付ける人が大半なの

に」

「そう言うのは好きじゃない。スタートラインは違っても、ゴールラインは同じでありたいんだ」

「なるほど」。それで、次は何ですか？」

「仮面ライダーカブトのメインのゼクター五種類、全部をデバイスにして、尚かつそれを全部使えるようにしてくれ」

「カブトとくワガタとく、ハチとくトンボとく、それからサソリでしたっけ？」

「ああ。それと、一度それで変身したら、解除するまで別の奴は使えない、つて設定で頼む」

「細かいですね」

「まあ、色々あってな。注文は以上だ」

「はい」。『Sランク魔導師相当の素養』と、『主要ゼクター五つがデバイス。ただし、制限付き』、で良いですか？」

「おう、それで良い」

「りよ〜かいです〜。それじゃあ、行ってらっしゃい」

すると、立っている場所にいきなり穴が空いたと思うと、彼はそこに吸い込まれていった。

「何じゃこりゃー……!?!」

「では、良い人生を〜」

次に彼の意識が戻った時に視界に入ったのは白い天井、そして見知らぬ女性の顔だった。

起き上がろうとするが起き上がれない。それに、妙に世界が広く感じる。

そう、青年は『赤ん坊』になっていた。精神以外の何もかもが。

……まさか、肉体的にもゼロからスタートかよ……

「おめでとございます、クラインさん！元気な男の子ですよ！！」

こうして、リリカルなのはの世界に一人の男が放り込まれた。新しい人生を歩むために……。

プロローグ：えっと・・・転生してみたんだ・・・・・・・・（後書き）

遂に始まつちやいました、『魔法少女リリカルなのはZECT』。

初めまして、作者のレイキャシールです。

素人に毛が生えたレベルの拙作ですが、暖かい眼で見守ってやって下さい。

よろしくお願いします。m | | m

第一話：俺はアイツを呪いたくなってきた・・・（前書き）

勢いが有り余っています。

お待ちかね（？）の第一話です。ゆっくり読んでいってね！

第一話：俺はアイツを呪いたくなってきた・・・

【side him】

ここで自己紹介。

俺の名前はリョウト・クライン。ミッドチルダの首都、クラナガン生まれ。4才のガキンチョ。

『管理局』や『魔法』といった単語が周囲を飛び交っているから、リリカルなのはシリーズのそれで間違いないだろう。

親父のアルフレッド・クラインは時空管理局の執務官。言うなればエリート局員。

お袋のサヤカ・クラインも魔導師だったが、生まれつき体が弱かったらしく、俺を生んでから直ぐに他界してしまった。

で、親父が男手一つで俺をここまで育ててくれた。

今日はミッドでは必ず一回は受けることが義務付けられている魔導師適性検査のため、時空管理局の本局に来ている。

余談だが、たった4年、前世では割とあっという間に感じたが、今は死ぬほど永く感じた。

検査と言ってもどんなことをされるのか、内心ドギマギしていたが・・・。

「はい、すぐに終わるからね。ちよつとの間我慢してくれるかなー？」

検査台の上に寝かされて、その上を何度か機械を往復させるだけの簡単なお仕事でした。

本当にありがとございます。

で、数日後・・・。

「ただいまーっと。リョウト、この前の検査の結果が出たぞ！」

ドアを開けて、あごひげを蓄えた男が入って来る。
彼がアルフレッド・クライン、俺の親父だ。

「おかえり、親父、カブト」

《ただ今戻りました、リョウト坊ちゃま》

彼の顔の横でフヨフヨ浮いているカブトムシのようなメカがカブト。
親父のデバイスだ。

「メシは？」

《帰ってきて第一声がそれですか……》

「はっはっは、流石は俺の息子だ！っと、それより結果だ結果」

親父は手にしていた茶封筒をゴソゴソやって、一枚の紙を取り出す。

「おお、これはこれは……」

「？」

「効いて驚くなよ。魔導師ランクS、雷の魔力変換資質のオマケ付きだ！」

Sランク！？確か親父がSに限りなく近いAAAで、なのはとフェイトがSに到達するのはStSの少し前の段階だったから相当なものだろう。

ここで俺は一つ、不安要素を見つけた。

俺の知るリリなのの世界と完全に一緒かは分からないが、少なくともこの二人にはメインキャラ補正があるはずだ。

この段階で俺は二人より強いことは……

「・・・フラグ・・・へし折っちまった・・・かも・・・(ボソッ)

「ん？なんか言ったか、リョウト」

「うんにゃ、何にも」

まあ、細げえことは後でゆっくり考えればいい話だ。

だが、その『後でゆっくり考える』が後に凄まじいスケールになることは、俺自身まだ知らなかった・・・。

良い子のみんな、こんにちわ！・・・って何言ってるんだよ・・・

。。OTL

改めて自己紹介。

俺はリョウト・クライン。ミッドチルダ首都、クラナガン生まれ。6才のジャリガキ。

何の因果か、俺と親父は第97管理外世界、地球に引越した。

住んでる場所は海鳴市、通っている学校は私立聖祥大学附属小学校。ここまできてもう分かると思うが、なのは達3人の同級生だ。

余談だが、役所には日本人とアイルランド系アメリカ人の混血と言う事でお茶を濁している。

そんなある日のこと。ヒマなものだから、昼寝でもしようと俺は裏庭に向かった。

すると、3人の女子が何やらもめ事を起こしているではないか。

一人は茶色の髪をサイドツイン(かなり長っ細いが)にまとめ、もう一人は金髪のロングストレート。

この二人が掴み合いを演じており、それを最後の一人である瑠璃色の髪の女子がオドオドしながら経過を見ている。

「おいおい・・・あのクソ女神、もう一回死んだら覚えとけよ・・・

・・・」

半分八つ当たり混じりに吐き捨て、俺はその集団に接近する。

「ほら、その位にしておけて。何があったか知らないが、ケンカは良くないぞ」

「何よ！関係ないのにしゃしゃり出て来ないでくれる!？」

近付いて分かったが、やはり茶髪ツインは高町なのは、金髪ストリートはアリサ・バニングス。そして瑠璃髪が月村すずかだった。

「それよりアンタ、どこのクラスよ!？」

アリサの性格は原作（なのか？）そのまま。早速俺に食いついてきた。

「俺はリョウト・クライン。クラスは一応、お前らと同じだよ」

彼女はしばし沈黙した後、思い出したらしく再び俺の方を向いた。

「ああ、あの根暗ね!」

「・・・・・・」

今のは来た。さすがに来た。トサカに來たぜ、ぬるりと・・・。

「お前な・・・人には言つて良いことと悪いことがあるって、お婆ちゃんに教わらなかつたか、ゴルア!？」

「グランマなんて今頃はウェールズで揺り椅子に揺られているわよ

!!!

大体、横から入ってきて偉そうなのよ、このストコドッコイ!!」

「んだと、このデコッパチ！！泣かすぞワレ!？」

「やれるものならやってみなさいよ!!」

「やめてっ!!」

今にも殴り合いを始めそうな俺とアリサを止めたのは、さすがの一声だった。

「ま、まあまあ・・・二人ともその位に・・・ね？」

頃合いを見計らったのか、なのはがフォローに入る。

俺も驚いたが、何よりアリサが一番驚いたらしく、ポカンと口を開けたまま静止していた。

「・・・悪かった、感情的になつて・・・」

「ごつちこそ・・・ごめん・・・」

落ち着いた所で、俺は事情を聞くことにした。

何でも、アリサが、さすがが付けていた力チューシャを貸してもらおうとしたところ、それを誤解したなのはが割って入り、掴み合いにまで発展してしまった、とのことだ。

「けどまあ、良かったな。ええつと・・・」

「月村すずかです」

「私はなのは。高町なのは。よろしくね、リョウト君!」

かくして、意気投合した俺達は、この日から友人となった。

もともと無愛想な上に、目立つのが嫌いだったから、この世界でも友達が居なかった俺には曙光だった。

だって、前世での小学生以来の女友達だもん!

フラグクラッシュしたかと思ったが、取り越し苦労だったみたいだな……

俺が学校から帰ってくると、玄関の前にスーツを着た女の人がいた。

「あなたが、リョウト・クライン君ですね？私は時空管理局の者です。今日は、重要な事をお伝えに参りました」

「……とりあえず、上がって下さい」

「アルフレッド・クライン執務官は第9無人世界での任務の最中……殉職なされました……」

「親父が……!!」

その女の言ったことが、俺には信じられなかった。

「うそだろ……死んだなんて……」

「残念ですが、私も未だに信じられません……。また後日、詳細な説明をするために参りますので、何かご希望があれば、その時にお申し付け下さい。では、失礼します」

女が名刺を置いて帰った直後、茫然自失となっていた俺の前に、第二の来訪者が来た。

机の上に魔方陣が出現したと思うと、カブトが現れたのだ。

《……リョウト坊ちゃま……実は……》

「親父が死んだんだろ？さっき管理局の人に説明してもらった。そ

れより、どうしたんだ？」

《ここに来る前、アルフレッド様からのメッセージをお預かりしています》

「親父から!？」

《はい。今から再生します・・・》

カブトの背中が光ったと思うと、何やら映像が投影される。

これはホロスクリーンと言って、ミッドでは当たり前のように普及している技術だ。

画面のカウントダウンが終わったと思うと、映像が始まる。

画面の中の親父は、口から血を流していた。

《リョウト・・・お前がこのメッセージを見るとときには、俺は既にこの世にはいないかもしれない。》

俺が長年追っていた、ある古代遺物、ロストロギアの違法取引。その証拠をようやく見つけることができたが・・・どうやら掴んだのは悪事の尻尾だけじゃなかったらしい、ただいま逃走だ。正直もうだめかもしれない。

だが、悲しまずにこれから言う事をよく聞くんだけ。知つてのとおり、ミッドでの適性検査でお前に魔力総量S+相当の潜在能力があることが分かっている。

だから俺が死んでも、デバイス達がお前の力になってくれるはずだ。俺にはカブトしか起動させることが出来なかったが、お前は俺と母さんの息子だ。残りの四つのデバイスも、きつと動かせるはずだ。そいつらは、奥のクローゼットの中に入っている。

後はミッドに帰って管理局に入るもよし。地球に残って、のんびり暮らすもよし、だ。

俺の婆ちゃんも言っていた。

『まず考える、そしてやり通す。そうすれば、自ずと未来が見えてくるはずだ』、ってな。

それと、最後に言わせてくれ・・・》

ここに差し掛かるところで、画面の中の親父の眼からは大粒の涙がこぼれ始め、それに釣られて俺も涙ぐみ始めていた。

《・・・サヤカが・・・母さんが逝ってから、仕事が忙しくて、誕生日すら祝ってやれなかった父さんを、許してくれ・・・。それじゃあ、コイツをカブトと一緒に転送させる。オヤジの最期の説教、しっかりと耳に焼き付けとけよ・・・！！》

ここで映像は途切れた。おそらく、追っ手が来たか、撮影を止めたのだろう。

《以上が、マスターの最期の言葉です。ここまで来るのに、32時間ほど掛かってしまったので、おそらく・・・。》
「・・・。」

ミッドに住んでいた頃、親父の同僚であるゲンヤさんって人が家に遊びに来た際、親父のことを「砲撃魔法を受けても簡単には死なない男」と揶揄していた。
それがこんなにも、アツサリと死んじまうなんて・・・。
とりあえず俺は席を立ち、外出の用意を始める。

《坊ちやま・・・？》
「出かける。ちよっと、頭を冷やしてくるわ・・・。」

自転車を走らせること十数分。俺は臨海公園にある展望台に来ていた。

悲しいことや、嫌なことがあったときには、こうやってボンヤリと空を眺めて頭の中をスッキリさせるのが週間になってしまった。

《ここにいらっしやっただんですか》

後ろを振り向くと、カブトが魔力の羽を展開して飛んできていた。て言うか、見つかったら一騒動起きるんじゃないかねえかと喉まで言いかけたが、黙っておくことにした。

「着いてきたのか……」

《『息子の力になってくれ』。それが、マスターの遺言ですので》
「……」

俺はカブトを一瞥し、今度は海を眺める。

遠くからだとよく分からないが、今日も穏やかな海面。まるで俺の心のような。ちょっととした事が切っ掛けで、如何様にも荒れる。そんな状態だった。

「……カブト」

《はい》

「お前以外のデバイスにも、会わせてくれないか？」

《かしこまりました。……坊ちやま、あれは？》

「うん？」

カブトに言われて、周囲を見渡す。

すると、花壇の脇に何かが倒れているを発見した。

「……猫……？」

茶色い毛並みの猫は別段珍しいわけではない。だが、その額には

赤い宝石の様な装飾が付いていた。
外せそうな気配も無い。

額がおかしい茶毛の猫……こりゃとんでもねえもんかもしれないな……

とりあえず、俺はその猫を抱えると、服に毛が付くのも気にせず家へ戻った。

家に帰った俺は、適当に使わなくなったタオルを重ねて簡易的な寝床を作り、猫をそこに寝かせた。
で、私服に着替えて親父のダイニングメッセージ（違うか？）に従ってクローゼットの中をガサゴソやっていた。

「お、これか……？」

中から出てきたのはやや大きめのアタッシユケース、そして横長のジュラルミンケース（ピリヤードのキューを入れて携行するカバンみたいな感じ）だった。

まず、俺はアタッシユケースの方を開ける。

中には緩衝材の上に乗せられたトンボのようなメカと黒いグリップ、そしてそれを囲むように四つのくぼみがあり、内三つをクワガタ、ハチ、そしてサソリの様なデバイスが占拠していた。

「こいつらが親父の言っていた……」

《はい。私の、姉妹達です。私はこの中で、四番目に作られました》
《うーん、なに？メンテナンス？》

すると、別の女の声、今度は快活なタイプのそれが聞こえた。
俺が周りをキョロキョロしている、目の前にトンボデバイスがフヨフヨと浮いていた。

《・・・あれ？君誰？マスターじゃないね・・・ドロボーさん？》

「いや、俺は・・・」

《え？あたし達、ユークイされたの！？》

《そんなわけ無いでしょう！！ここはマスターの家ですわ！》

《なんだい、騒々しい・・・》

それに釣られて、クワガタと八チ、サソリデバイスも起動して動き始めた。

《静粛に。今日は皆さんに話があります》

彼女らが落ち着くのを待つて、カブトが説明を始める。

親父が殉職したこと、俺が引き続き使用すること・・・。

《そんな・・・マスターが・・・！》

《うえーん！パパー！！》

機械のくせに震えているのがハチ型のザビー。で、泣き声(?)を
発しているのがクワガタ型のガタック。

と言うか親父よ、いくらAIが女声だからって、『パパ』は無いだ
ろ、『パパ』は・・・。

《ピーピー泣くんじゃないよ！鳥じゃあるまいし・・・》

不機嫌そうにボヤク紫のサソリ型がサソード。この中で一番最初に
作られた。(と、カブトに説明を受けた)

《ふーん、それで、ボク達を息子の君が引き継ぐって訳？》

最後に言ったボクっ子が、トンボ型のドレイク。

と言うか、親父の趣味って、一体………？

《じゃあ、要するにキミがボク達の新しいマスター？》

《ちょっとお待ち下さい、ドレイクお姉さま！どこの誰とも分からないアホボンが、アルフレッド様の息子と言うこと自体信じられないのに、それが私たちを使う！？

考えただけでも虫酸が走りますわ………！！》

「オイコラ、お前も虫（型のメカ）じゃねえか！！」

《私をそんじょそこの昆虫と一緒にしないでいただけ！？》

と言うかこの八チ、親父には様付けで俺はアホボン呼ばわりかよ！！
っと、あの猫の事を忘れていた。

とりあえず、俺は白湯を皿に入れておいて、念話で話しかけた。

う………ここは………？

ここは俺の家だ。道の真ん中でぶっ倒れていたのを、拾ってここ
まで持ってきた。

見たところ、誰かの使い魔っぽいが………どこから来たんだ？

「っ、何故わかつたんですか！？」

「まあ、ちよつとばかり人とは違う過去を歩んできたからな。俺は
リョウト・クラインだ。お前は？」

頃合いを見て、俺は自己紹介する。もちろん、管理世界出身である
ことも。

「私は………リニスと申します」

「リニス……って、あのプレシア・テストロッサの使い魔の……？」

「確かにそうですが……どうしてそれを？」

「俺には前世の記憶が丸々残っているんだ。で、そこにたまたまお前のプロフィールがあっただけだ」

「そうですか……では、これで」

「何処へ行く気だ？」

「何処か適当なところへ。そこで静かに、消えて逝こうと思います……」

「お前……本当はどうしたいんだ？」

「えっ……!？」

彼女がリニスなら、こちらにとって大きなプラスになる。

アリサやすずかは一般人だし、なのはも魔法の全部を知っているとは思えない。

だが、仮にも大魔導師の使い魔だった彼女を仲間にするれば、少なくとも一般的な情報くらいは手に入るはずだ。

何より、ここで俺が彼女を見捨てたら、間接的に殺したことになるも同然なので、寝覚めが悪い。

「私は使い魔です。契約が終われば、後は消えゆくのみ。生きる価値など……」

「お婆ちゃんは言っていた」

「えっ……?」

「『命は口ウソクの様なものだ。必ず消えゆく運命にある。だが、強い意志はそれすらも覆す』ってな。もう一度聞く。本当はどうしたいんだ？」

「私は……」

リニスは俯いて、か細く言う。

「生きたい……です……！生きて、生き抜いて、やり残したことを……！」

「じゃ、交渉成立だな」

そう言つて、俺は床に魔方陣を出現させ、使い魔契約の用意をする。

「後は、魔力を注ぎ込むだけか……。っと、契約目的はどうする？」

「それは……考えてませんでした……」

「なら、こうしよう。『俺と共にあれ』」

「ですがご主人様、それでは……！」

「強制力がないのは承知の上さ。ただ、これほどわかりやすいのも無いと思うぞ？」

あと、俺のことは『リヨウト』って呼び捨ててくれて構わない」

「……はい、リヨウト……」

「じゃ、いくぞ？」

「……何時でもどうぞ」

俺は両手の平に魔力を溜めて、ゆっくりとリニスへと流し込む。すると、やつれていた彼女の毛並みに見る見るつやが戻っていき、美しい琥珀色になる。

それと同時に、姿も子猫から人間の少女（見た目は十代後半くらい）に変化する。

「ふう……契約完了です！」

「なら良かった……。久しぶりにやったから疲れたぜ……」

《なななな、今度は使い魔！？》

《リニスお姉ちゃん、よろしくねー》

「はい。えつと・・・」

《あたしはガタックだよー》

「よろしくお願いしますね、ガタック」

《うん！》

どうやらガタックの基本性格設定は人なつっこいタイプらしく、またしてもうるたえるザビーを尻目に、直ぐリニスに懐いていた。

《さて、ここで中断されてしまいましたが、私たちの説明の続きを》

「おう、頼むわ」

《この前も言いましたが、私たちと接続ツールの呼び出しはこの・・・》

そう言つてカブトは一本の腕輪を持つてくる。

そこにはマイクのようなものと赤、青、黄色、紫、水色の五つのボタンのある機械が付いていた。

「これは・・・？」

《“ゼクトレシーバー”と言つて、私たちとのホットラインを結ぶ専用の通信用子機です。対応した色のボタンを押して、呼んでいたければ転送魔法を使って直ぐにでも参上します》

《ま、私を呼び出すことがないよう、せいぜい頑張ることね、ボウヤ》

「うるへー、余計なお世話じゃ」

俺はカブトからゼクトレシーバーを受け取り、右手首に巻く。（ザビーは左腕に着けるため、邪魔にならないようにするためだ）

「しっかし、お前らはデバイスと言つてもどれに該当するんだ？」

《そう言えば、考えたことも無かつたわね・・・》

《局にいた頃は、便宜上インテリジェントデバイスとして登録されていた》

魔法使用の補助となるデバイスは、全部で五種類ある。

高度な電子頭脳を搭載した、完全オーダーメイドのインテリジェントデバイス。

それを簡略化し、ある程度の使いやすさと汎用性を確保したストレージデバイス。

剣や槍など、武器を模した接近戦重視のアームドデバイス。

固有の人格を持ち、魔導師や騎士と融合することで絶大な力を発揮するユニゾンデバイス。

そして、補助、召喚魔法などの使用を専門とするブリストデバイス。カブトは一応自分達をインテリジェントデバイスと言ったが、どうも俺にはそうは思えなかった。

「便宜上って事は、正確な分類は不明って事だろ？」

《そうなります》

「ふむ・・・じゃあ、こんなのどうだ？」

ここで、俺はあることを思いだした。

“仮面ライダーカブト”では変身ツールのことを全て“ゼクター”と呼んでいた。

ならば・・・・・・・・。。。

「そのゼクトレシーバーから取って、“ゼクターデバイス”ってのはどうだ？」

《“ゼクターデバイス”ねえ・・・良い響きじゃない。私は賛成するわ》

《あたしも、それが良いー！》

どうやらなかなか好感触だったらしく、サソードとガタツクが早速賛同してくれた。

《じゃあ、ボクもさんせい！》

《わかりました、それで》

続いてカブトとドレイクがそれに加わり、

《……まあ、皆が良いと言っなら、私も賛成しますわ……

》

《またまた、強がっちゃって、素直になりなよ》

《べつ、別に他意はありませんわ！賛成したのも、皆さんの総意というわけで仕方が無く……》

最後にザビーが渋々賛成票を投じる。

「言うかコイツ、俗に言う“つんでれ”か!？」

「ほんじゃ、俺はちよつち出てくるわ」

「夕食の買い物ですか？なら、私も手伝います」

「おう、頼むわ」

この後、お隣さんやマンシヨンの管理人さんにリニスの事をあれやこれやと聞かれたが、父方の従姉妹と言う事で、何とか誤魔化した。そしてこの日、俺はデバースと、相棒を得た。

運命の歯車が、静かに回り始めたとも知らずに……。

第一話：俺はアイツを呪いたくなってきた・・・（後書き）

どうもみなさん、レイキャシールです。いよいよ本編開始です。とりあえず、この段階では単なるオリキャラですが、これから羽化していきます。

変身は・・・もうしばらくかかりますので、お楽しみに！

第二話：運命、Startup

【Side Ryouuto】

「ふんっ……！はっ……！せえい！」

ある日の日曜日、俺は5才の頃からの日課となったトレーニングをやっていた。

始めたきっかけは至極単純で、万に一つ原作に介入しなければならぬ事態になったときに足手まといにはならないようにするためだ。当初は親父の真似をして腕立て伏せから始めたが、今ではマーシャルアーツをたしなむレベルにまでなっていた。

ただ、俺には唯一苦手なのがあった。それは魔法だ。すぐに出来たのは念話だけで、それ以外は親父の手ほどきを受けても成功することはあまりなかった。

「ふっ………チェスト!!」

回し蹴りの後に横蹴りを放つ。

蹴りを受けたサンドバッグは大きく揺れ、穴でも空かんばかりの勢いがつかがい知れる。

「リョウト、例の話ですが………」

「ああ、あれか」

リニスがお茶を淹れてくれたので、俺は一息つくことにした。

「親父がかき集めたデータを見てみたが、もしかしたら管理局の根底を揺るがす何か動いているかもしれない………」

リニスとは、25年前の隕石落下事件を知ってるか？」

「文献でしか知りませんが……。確か、ミッドの南部に中型の隕石が到着した事件ですよ。それがどうかしたんですか？」

「管理局が現在の組織編制になったのも、ちょうどそのあたりなんだ。同時に、未確認生物が現れるようになったのも。」

「本当はカプトが親父からもらってきた生の情報が良いんだが……」

《申し訳ありません。次元転移の際にデータのほとんどを消失してしまっただので……》

「気にすることはないさ。それに、お婆ちゃんは言っていた。」

『なぜ人は宝探しをするか。それは探すことも楽しみだから』。簡単に真実がわかったら、つまないだろ？」

《ですが坊ちやま、問題はその方法です。局の人間が関わっているとなると、外からでは手に入る情報に限りがあります。かといって、アルフレッド様のコネクションも……》

「そうなんだよなあ……。リニス、お前に頼みたいことがある。俺に、魔法を教えてください」

「お安いご用ですが……。いったいどうして？」

「俺は真実を知りたいんだ。そのためにも、戦うための力……。魔法が必要なんだ。だから頼む。俺に、魔法を教えてください！」

恥も外聞もなく、俺は彼女に頭を下げる。

前世での記憶があるとは言え、あの人は俺の親父であることに変わりはないのだから……。

「……。わかりました。私に教えられる範囲で良ければ、全てを教えてください」

「ありがとう、恩に着る……！」

「私はリヨウトの使い魔ですから、当然ですよ」

次の日から、早速特訓が始まった。
まず、俺が習い始めたのが放出する魔力の量と質を調整する方法だった。

これは、魔力を流し込めば解除できるバインド魔法を、自力で解除するもので、最適な値にならなければ絶対に解くことが出来ない。
まず、指二本から始まり、次に三本。三本が四本になり、片手が両手になり、そして始めてから一ヶ月後には全身を拘束されても速攻で解除が可能になった。

実際のバインドではこうはいかないかも知れないが、少なくとも魔力の調節はだいぶ上手くなった。
結果、カブトも俺を認めてくれたらしく、『マスター』と呼んでくれるようになった。

ちなみに、ガタツクは『お兄ちゃん』、ドレイクは最初から俺を『マスター』と呼んでいる。

もっとも、ザビーとサソードは『リョウト』と呼び捨てだが……。

「凄い上達速度ですね。局の魔導師でも、同じレベルに達するには少なくとも半年はかかりますよ」

「たまたま上手く行って、そのコツを掴んだだけだ。それに、ゼクターデバイスでは飛行魔法は使えないっほいし」

《申し訳ありません……》

「いや、カブトが謝ることじゃないんだがな……」

そう、カブト達ゼクターデバイスは調べて見ると相当な性能を持っていた。

バリアジャケットは一般的なそれと比べると倍近い強度を持つが、消費する魔力もその分多いという代物。

一緒に展開される専用武器も、安物のデバイスは歯牙にもかけない

ほどだった（相場がどのくらいか分からないので断定できないが）。さらに、封入されている術式も強力無比なものばかりだが消費する魔力も半端でなく、場合によっては威力過剰になりかねないなど、欠点も沢山抱えていた。

さらに、余剰魔力がほとんどでないため、飛行魔法の使用は苦手だった。

ただ、カブトとガタツクはシステムに余裕があるらしく、強化パーツを付けるなどすれば飛行は可能とのことだ。

「ふいーっ、いい汗かいたぜ・・・」

「お疲れ様です」

「あ、そうだリニス。今日はこの位にして、翠屋に行かないか？」

「ミドリヤ、ですか？」

「ああ。近所にあるサテンで、この前話したダチの親が経営しているんだが、そのスイーツが美味くてな・・・。特にシュークリームは、カスタードの中にほんのりと広がるバナビーンズの香りがまた・・・。」

「なるほど・・・それは美味しそうですね・・・」

その様を想像したらしく、リニスの目は爛々と光っていた。

と言うか、猫なのにスイーツ好きって・・・使い魔だから良いのか？

「じゃあ、決まりだ。早速行こうぜ！カブト達は留守番頼む」

「はい！」

《了解しました》

《いってらっしゃーい！》

カブトとガタツクに見送られ、俺達は翠屋へと向かった。

前世でも見たことがある喫茶・翠屋。

第一期を語る上で、この店のスイーツは欠かすことが出来ないエッセンスだ。

経営しているのは、なのはの両親である高町士郎さん、桃子さんご夫妻。

たまに兄の恭也さんが、姉の美由紀さんが手伝っている。

「やあ、リョウト君、いらっしやい」

親父が存命だった頃は、よく一緒に来ていた。

そのため、士郎さんとももう既に見知った仲だった。

「こんにちは、士郎さん。今日も、頼みます」

「了解、いつものアレだね？」

テーブル席に座った俺は必ず頼んでいるアレ、リニスはコーヒーとシュークリームを注文した。

「お待ちせしました、チョコレートパフェとシュークリームセットになります」

「あざーす、美由紀さん。ところで、恭也さんは？」

黒髪に眼鏡の女性 美由紀さんからパフェを受け取った俺は、早速上に乗っているソフトクリームをスプーンで口に運びつつ、恭也さんの居所を聞く。

「ああ、お兄ちゃんは・・・今デート中。今日一日帰らないかも、だって」

「あの人の彼女って、一体誰なんですかね・・・？」

「リョウト君は、忍さん知ってる？」

「確か、すずかの姉貴・・・でしたっけ？何度か話だけは・・・」

「そうそう。なのはのお友達の、お姉さん。その人がお兄ちゃんの彼女」

「・・・・・・・・リア充してますね・・・」

「でしょう・・・・・・・・？」

その後、土郎さん達にリニスを紹介（以前と同様に父方の従姉妹で、最近になって来日したと言う設定で）した。

「お久しぶりですね、リョウト君」

しばらく後、丁度パフェを食べ終わるタイミングを見計らっていたかのように、俺に親父の訃報を伝えに来た女性局員が現れた。

「えっと・・・・・・・・アンタは・・・」

「時空管理局執務官補佐、リリーシャ・アイヒマンです。クライン執務官のサポートをしていました。」

「・・・失礼かと思いますが、それを承知でお聞きします」

向かいに座った彼女 リリーシャさんは重く口を開く。

「管理局の児童保護施設に、入る気はありますか？」

「・・・・・・・・どういう意図ですか・・・・・・・・？」

「クライン執務官が殉職なされた際、局ではあなたの潜在能力に目を付け、それを保護・・・・いえ、拘束と言ってもいいでしょう。それをするつもりで、彼の補佐をしていた私に指示してきました。その際、力ずくでも連れてこいとも・・・・・・・・」

「でも、それができなかつた」

「はい。サヤカの・・・・・・・・親友の息子にそんな酷い真似ができるわけ

ありません。だから、私はあなたの意志を尊重することに決めて、こうして交渉に臨んでいるのです」

「お気持ちは嬉しいです。けど……」

俺は紅茶を一口飲んで、続ける。

「親父を殺した黒幕が、もしかしたら管理局にいるかもしれない。この可能性を捨てきれない今、連中の下へ行くのは危険なような気がします。」

それに、親父の集めたデータも整理しないと……」

「仮に、私とその黒幕の一味だとして、なぜそこまで話すのですか？」

「……単純に、アンタを信じてみようって気が起きただけさ。それに、アンタを補佐に選ぶ親父の目は間違っちゃいないし、アンタは嘘をつく人には見えない」

「……そうですか。どうやら、余計な気遣いだったようですね」

リリーシャさんは席を立つと、去り際にこう言った。

「今後は、個人的にあなたをサポートしようと思います。困ったことがあったら、何時でもデバイスで連絡して下さい。では、失礼します」

彼女が帰った後、俺は頭を抱えてしまった。

「……やっべえ……」

「何がやばいのですか、リョウト？」

「いくら何でもかっこつけすぎたか……？」

「どうかしたのかい、リョウト君？」

一段落付いたらしく、土郎さんがこっちに話しかけてきた。

「実は、かくかくしかじか……」

とりあえず、俺は話せるだけ事情を話した。（もちろん、管理局のことは伏せた上で）

「ふむ……そうか。君も辛い思いをしてきたんだね」

「ええ、まあ……」

「実を言つと、私は以前、仕事で事故にあつて生死の境をさまよつたことがあつてね。その所為で、家族に迷惑をかけてしまったんだ」

「……そんなこと、どうして俺に……」

「どうしてだろうね……。シンパシーみたいなものを君に感じたから、かな？困ったことがあつたら、何時でも相談すると良い。私たちは、君の味方だ」

チクシヨウ、目から汗が出てきやがる……なんていい人なんだ……！

「……はい……ありがとうございます」

家に帰った俺達は、トレーニングを再開した。

だが、何かが心の奥底に引っかかっていたらしく、動きにキレがないとリニスに指摘されてしまった。

「とつても、いい人達でしたね」

「ああ。それにしても、これからどうするか……」

このマンションは親父曰く、買った奴だからとりあえず家賃の心配はしなくて済む。

だが、問題は生活費だ。

水や食料、電気や消耗品は使えば減るし、減ったら補充しなければならぬ。それには金がかかる。

「せめて、親父のヘソクリとかがあれば少しは打開策が見えるんだが……」

《あら……？これは……。……リョウト、ちょっとこれを見てもらえる？》

「どうしたんだ、ザビー？」

データを漁っていたらしいザビーが両眼から映像を投影する。

「ネット銀行の口座……か……。？えっと、一、十、百、千……なんじゃこりゃ!？」

俺は目ん玉が飛び出しそうなくらいに驚いた。

「……なぜなら前世でも見たこと無い額の金が入っていたのだから。」

「……これだけあれば、少なくともリョウトが成人するまでは保ちそうですね」

「……だな……」

金の問題はいとも簡単に解決。

執務官って、結構高給取りなんだな……。

あれから3年の月日が経ち、俺やなのは、アリサ達は9歳になった。そう、いよいよアニメ第一期、通称・無印編が近付いて来たのだ。原作に介入するかどうかは、今はまだ未定だが……。

そんなある休日でのこと、暇だった俺は図書館へ来ていた。

「へえ……ホージャンとアメージュってこの世界にもあったのか……うん？」

ふと、俺が読んでいた雑誌から顔を上げると、丁度視界の中に、高いところにある本を取ろうとして悪戦苦闘している車椅子の女の子が入っていた。

茶髪のおかつぱ……ってことは、はやてか……。ダチになっておくのも悪くないな

思い立ったら即、実行。俺は彼女の隣に移動する。

「……どれを取れば良いんだ？」

「あ……えっと、右から5番目のをお願いします」

言われたとおり、俺は本を取って手渡す。

「ありがとうございます」

「良いつて事よ。ここへはよく来るのか？」

「はい。えっと……」

「俺はリョウト・クライン。見ての通り混血だ」

「私は八神はやて言います。えっと……」

「普通に名前で呼んでくれて構わない。それに、困ったときはお互い様だろ？」

その後、俺とはやてはしばらく談笑した。
ただ、俺の知るはやてと違う点は、双子の姉がいて、名は八神^{なみき}凧紗
と言っらしい。

「大変だな、お前も俺も、やること多くて」

「せやけど、私には凧紗姉がいるし、リョウト君にもお姉さんがいるやろ？ たった一人よりはウン万倍も楽ぢんや！」

「だな。じゃあ、俺はこれで失礼するぜ」

「ほな、また機会があれば、お話しよか」

「おう！」

エントランスに向かう途中、サイドテールの髪型をした、はやてと
同い年の少女とすれ違った。

この出会いが後に、歴史に残るあの事件の発端になるとは、この段
階では俺にもわからなかった……………。

助けて……………

次の日の夕方。家でゴロ寝していた俺の頭の中に、例の念話が響く。

「…………アイツか…………？」

《どうしたんですか…………？》

誰か…………助けて……………！

「……………！」

《マスター！？》

「悪い、カブト。リニスに戻ったら『すぐ帰る』って伝えといてくれ！…！」

カブトの声を振り切って、俺は家を飛び出した。

念話が聞こえたってことは、“アイツ”が・・・ユーノ・スクラ
イアがここにいてることだろ・・・？

「あれっ、リョウト！？何でこんな所に？」

数分後。発信源に到着した俺の前には、友人その1 アリサ・バニ
ングスがいた。

あいつがいるってことは・・・

「んなことどうだって良いだろ。それより、なのはとすすかは？」
「あっち」

アリサが指さした先には、ユーノ（フェレットモード）を抱えたな
のはと、それを気遣うすずかがいた。

「怪我しているのか？」

「・・・みたい。獣医さんの所に連れて行かないと・・・」

「じゃあ、俺が行く。丁度自転車もあるしな」

「あ、じゃあお願いできる・・・？」

「任しときなって!!」

俺はなのからフェレットを受け取ると、上着をかごに敷いてその
上に乗せ、全速力で自転車を走らせる。

「っしゃあ、振り切るぜ!!」

ものの数分で動物病院に到着した俺は、先生に事情を説明して直ぐに診てもらっていた。

「かなり体力を消耗してはいるけど、怪我自体は大したこと無いよ」「ふう・・・なら良かった・・・」

「そうですか・・・ありがとうございます!」

フェレットの治療が終わり、俺は後から合流したなのは達と共に獣医から経過を伝えられていた。

「じゃあ、今日はもう遅いから、家に帰りなさい」

「はい」

なのは達が先に出たところで、俺も上着を回収してその場を後にした。

「・・・そろそろだな」

俺は晩飯のパスタ（リニスの手作り。結構ウマイ）を食べた後、リビングでバラエティ番組を見ながらゴロ寝していた。そして、CMに入ったところで、すつくと立ち上がって上着を手に取り、外へ出ようとする。

「リヨウト、どこへ行くんですか?」

「ん?ああ、悪い。さっき話題に上げてたフェレットのどこへ行く」

「あなたは転生してこの世界へ来た、と言っていましたね。と言う事は……」

「ああ。あのフェレット、あれはこの世界のモンじゃない」

《と言う事は……魔導師が変身した姿であると……?》

「十中八九そうなる」

「……わかりました。あまり遅くならない内に帰るんですよ」

「ああ。それじゃあ、行ってくる。いくぞ、カブト!」

《心得ました》

「行ってらっしゃい」

自転車を走らせて先ほどの動物病院に到着したが……

「くそつ、遅かったか……!」

既にスライムのような怪物が現れていた。

その近くには白いバリアジャケットを纏い、杖を持ったなのはもいる。

《マスター……どうしてこのことを?》

「さつきもりニスに聞かれたが、俺は転生してこの世界に来た。だからこの事が起きるのも知っていた。ところで……」

《はい?》

「どうすればお前を使えるんだ……?」

《……まだ説明できていませんでしたね……。では、私の背中のボタンを押して下さい》

「どうか……?」

俺はカブトを手にとると、言われたとおりに背中のスイッチを押す。

すると、銀色のベルトの様なものが転送され、俺の腰に巻き付いた。

「おお・・・!!」

《本来はゼクトレシーバーを使って、同時に呼び出す物ですが、今回は緊急事態ですのでご了承を。次に、『変身』のかけ声と同時に私をバックル部分に装着してください》

「そこまで一緒とは・・・。まあいい、変身!!」

《Henshin》

そして、彼女をバックル部分に着ける。

すると、内包されたバリアジャケットが俺の魔力を使って開放され、徐々に体を覆っていく。

そして、蛹をモチーフとしたカブト・マスクドフォームに変身が完了した。

「すっげえ・・・!!」

《この状態では、クナイガンが使用可能です。今回は私が自動的に展開しますが、次からはご自分でお願いします》

「わかってるっての。じゃあ、行くぜ!!」

そうこうしている内になのはが追い詰められ始めたので、俺はカブトクナイガン・アックスモードを掲げて怪物に斬りかかった。

【side over】

【side Nanno ha】

リョウト君と別れてから、家に帰った私はずっとあのフェレットさんの事が気になっていたの。

「……………」

「どうしたんだ、なのは？浮かない顔をして」

晩ご飯の時もまだ引きずってて、あんまりお箸が進まないから、お父さんにも心配掛けちゃった……………」
たぶん今鏡で見たら、悪い表情をしていると思う。
お母さんもお姉ちゃんも、怪訝そうな顔をしている。

「うん、何でもないよ。大丈夫だから」

「そうか？なら良いけど、悩みとかがあったら、何時でも相談しても良いのよ？」

「うん。ありがとう、お姉ちゃん」

みんなの手前、ああ言ったけど、本当は違った。

「あのフェレットさん、大丈夫かな……………」

ベッドに入って、布団を頭から被ってみたけど、目が冴えて全然眠れない。

時計の針が何周もして、日付が変わったことを告げるアラームが下のリビングから響いてくる。

「……………やっぱり、行こう……………！」

私は心に決めた。

急いで着替えて、お父さん達に見つからないよう、こっそり家を抜け出す。

そこで、あの動物病院に向かって走った。

「ふえええっ!?!」

動物病院のすぐ前の道路には、何だかよく分からないグニャグニャした怪物がいた。

本当は私は寝ていて、今見ているこれは夢じゃないかってその時は思いかけてた。

でも……紛れもない現実だった。

怖くて、後ずさって、腰が抜けて尻餅を着いちゃう。この痛みが証明していた。

「君!」

声が出たから足元を見ると、噂のフェレットさんがいたの。

「危ないから、直ぐに逃げて!」

なんとか逃げようとするけど、足が震えて立てない。

「我、使命を受けし者なり。契約のもと、その力を解き放て。

風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。この手に魔法を。ジュエルシード、封印!」

その間にもフェレットさんは何かの呪文を唱えて、怪物を止めようとしたけど、全然効いていない。

「うわっ!」

弾かれるように金色の小さな体が吹っ飛び、赤い宝石が手元に転がってくる。

「……………」

「きゃあああああー!!」

怪物が私を見つけて、飛びかかってくる。

私はそれを無我夢中で掴んで、相手に向けた。

すると、バリアーの様なものが現れて、怪物を止める。

「くっ……こうなったら……。君、これを握って」

「えっ……………?」

フレットさんが、私に宝石を握るよう言ってきたから、言われたとおりに握りしめる。

「僕の言うことを、後から続いて言って!」

「うっ……………うん!」

「我、使命を受けし者なり」

「えっと、『我、使命を受けし者なり』……」

「契約のもと、その力を解き放て」

「『契約のもと、その力を解き放て』」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。この手に魔法を」

「『風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。この手に魔法を』」

「レイジングハート、セットアップ!」

「レイジングハート……、セットアップ!」

宝石が光って、トレーナーとキュロットだった私の服は、学校の制服みたいなデザインの白い服に変化していた。

「これは・・・なんなの・・・？」

「詳しいことは後で説明するから、今はアイツの動きを止めるんだ！」

「ええええっ!？」

私と魔法、そして運命の人との出会いは、こんな成り行きから始まったの・・・

【side over】

【side Ryou to】

「あ、あなたは・・・？」

「通りすがりの、正義の味方だ。手を貸すぜ！」

俺は彼女と話しながらもアックスを一閃させるが、相手が柔らかすぎでビクともしない。

どうやら、マスクドフォームはパワーに優れる分、細かい作業や攻撃は苦手という弱点もそのまんまのようだ。

「なら、これでどうだ！」

今度はガンモードに切り替えて射撃魔法を浴びせ、なのはも不慣れながらも援護射撃をしてくれる。

今度は何とかダメージを与えられたが、傷口が直ぐに再生してしまった。

「ダメだ・・・決定力がない。カブト、他に手はないか？」

《では、私の角、デバイスホーンを少し起こして下さい》

「こうか？」

「ふえっ!？」

空いている左手で角を前にズラす。すると、上半身を覆っている装甲が指先から両肩、胸、そして顔の順にせり上がっていく。

その様に、なのはから驚きの声が聞こえた。

「・・・次は？」

《『キャストオフ』とコールして、それを反対側に倒して下さい》

「こうか?・・・キャストオフ!」

《Cast Off》

そして、カブトに言われたとおりにデバイスホーンを反対側に倒す。音声と共に装甲が弾け飛び、それと同時に頭に着いている方の角ジャケットホーンが180度回転して顔の中央に収まり、カブトムシのようなシルエツトを形作った。

《Change, Beetle》

「わーお・・・!それで、クロックアップは!？」

《一応術式が組み込まれてはいますが、使い方を間違えると・・・》

「・・・間違えると？」

《根こそぎ魔力を持ってかれ、最悪の場合死にます》

「・・・止めておこう。それで、他に使える技は？」

《チャージボタンを押してホーンを一往復させることで、自動的に術式を選択、使用可能です。

1でライダーパンチ、1、2でクナイガンを用いた斬撃、ライダーエッジ。そして最後に、1、2、3で強力なライダーキックを放つことができます》

「じゃあ、一気に決めるか……」
《One Two Three》

俺はチャージボタンを順番に押し、ホーンをマスクドフォームの位置に戻す。

「ライダーキック!!」

《Rider Kick》

次にホーンを再び倒し、魔力を角経由で増幅させて右脚に集中させる。

「おりゃああああ!!」

そして助走を付けて跳躍し、怪物に必殺の跳び蹴りを放つ。
直撃を受けた相手は爆散し、後には小さな青い宝石の様なものが残った。

「ありがとうございます! 助けていただいて」

「思念体を一撃で……。もしかして、名のある魔導師の方ですか!?!」

「いや、気にすることはないさ。単なる通りすがりだからな。それじゃあ、あばよ!」

二人に軽く挨拶をすると、俺はその場から脱兎の如く、立ち去った。

! 　　こんな状況、一般人が見たら間違いなく俺達が疑われちゃう……

第二話：運命、Start up（後書き）

そろそろ原作と絡んできます。そんな第二話です。

それと、次回の投稿で主人公とデバイス（カブト）の設定を乗せる予定です。

お楽しみに！

オリジナルキャラクター設定（前書き）

宣言どおり、まずは主人公の設定です。

物語を読むときのエッセンスにどうぞ・・・

オリジナルキャラクター設定

オリジナルキャラクター設定

【リョウト・クライン】

この物語の主人公。カブト、ガタツク、ザビー、ドレイク、サソードの資格者でもある。

身長は、なのはより少し高い。

前世で交通事故に遭い、転生して現在の世界に来た。

原作知識はリリなのの方はSetSの前半部分まで。

仮面ライダーカブトの方は主要人物とあらずじを知っている程度。

(そのため、呪文や台詞とかはうる覚え)

マーシャルアーツの使い手でもあり、変身していなくてもある程度は戦闘は可能。

『ド』がつくほどの甘党で、翠屋のチョコレートパフェが好物。考え事をする時には顎に手をやるクセがあり、使っているデバイスの元ネタに応じた決め台詞を言う。

口癖は天道総司と同じく、『お婆ちゃんは言っていた。』

オリジナルキャラクター設定（後書き）

ストーリーが進むにつれて、順次追加していく予定です。

オリジナルデバイス設定（前書き）

こちらは、劇中に登場するオリジナルデバイスの設定です。
物語にアクセントを加えるスパイスとして……。

オリジナルデバイス設定

オリジナルデバイス設定（ウィキペディア風）

「ゼクターデバイス」

【概要】

待機時はそれぞれのモチーフとなる昆虫型のツール。展開時はバリアジャケットと接続ツール、ものによっては専用の武器で構成されている。

他のデバイスと異なり、特殊魔法「クロックアップ」の使用が可能である他、使用者とデバイスの魔力の波長が合わないと100%の力を発揮できないという奇妙な特徴を持つ。

そのため、一人の魔導師が複数のゼクターデバイスの資格者となる場合もある。

【共通事項】

・マスクドフォーム

強固な装甲に覆われた、パワー重視の重装形態。

魔力探知、視力、聴覚が常人の数倍から数十倍に強化されている。

バインド魔法と似た原理で下の装甲型バリアジャケットと結合しており、

理論上は砲撃魔法の直撃にも耐えられるため、状況によっては後述のライダーフォームより有利な場合もある。

クロックアップを含む一部を除いた魔法の使用は出来ない。

・ライダーフォーム

キヤストオフを経て変身する、ゼクターデバイスの実質的な基本形態。

搭載されている全ての魔法を使用でき、クロックアップも使用可能。

それぞれパターンは異なるが、大技の名前に“ライダー”と付くのが共通している。

・クロックアップ

ゼクターデバイスのみが使用できる特殊魔法。

魔力を使って一時的に時間の流れに干渉し、通常の次元とは異なるスピードで動くことが出来る。

しかし、莫大な魔力を消耗する上に加減が難しく、最悪の場合、魔力を根こそぎ持って行かれるリスクも伴う。

使用中は同じゼクターデバイスを通すか、特別な視覚器官を持つ者でなければ見ることが出来ない。

【カブト】

ゼクターデバイスの中で四番目に開発されたモデル。主な使用者はリョウト・クライン。

性能的に突出した面はなく、比較的扱いやすい。

攻守のバランスが取れていることから、相手の戦術が分からないときには大抵これをチョイスする。

モチーフはカブトムシ（マスクドフォームは蛹）。

AIの性格設定は寡黙で真面目。使用者の安全を常に考えている。

必殺技

デバイス本体の脚に内蔵されたチャージボタンを押した後、本体の角、デバイスホーンを

マスクドフォームの位置に戻し、再びライダーフォームの位置に動かすことで「R i d e r !」

の発声と共に発動状態となる。

・ライダーパンチ

魔力を拳に集中させてのパンチ攻撃。チャージボタンの「1」を押して使用する。

出だしが速いため、決め技ではなく、繋ぎ技として主に使用する。

・ライダーエッジ

クナイガンを用いた斬撃魔法。チャージボタンを「1」「2」の順に押して使用する。

発動状態になると刃の部分が赤熱化し、素早い動きで相手の体を切り裂く。

・ライダーキック

ジャケットホーンで増幅させた魔力を利き足に集中させ、跳び蹴り、回し蹴り、跳び回し蹴りのいずれかを放つ。

チャージボタンを「1」「2」「3」の順に押して使用する。

リョウトは主に跳び蹴りを愛用するが、カウンターを狙う際には回し蹴りも多用する。

ツール

・ゼクトフォールド

カブト、ガタツク用の接続ツール。

銀色のベルトのような形状をしており、ゼクトレシーバーの他、本体のボタンを押すことで呼び出す事が可能。

・カブトクナイガン

カブトの専用武器。

中・遠距離に対応したガンモード、ガンモードからの持ち替えで接近戦用のアックスモード、

フレームを取り払ったクナイモードの三パターンに変形する。

そのため汎用性が高く、どんな相手にもバランスよく対応できる。

【ザビー】

三番目に開発されたゼクターデバイス。主な使用者はリョウト・クライン。

手持ち武器や飛び道具はなく、インファイトレンジでの肉弾戦を想定したスピード重視の性能を持つ。

モチーフはスズメバチ（マスクドフォームは蜂の巣）。

AIの性格設定は高飛車なお嬢様タイプ。（ツンデレ成分あり）

必殺技

・ライダースティング

デバイス本体のチャージボタンを押すことで魔力を専用武器、デバイスニードルに集中させ、それを相手に突き刺すと同時に体内で炸裂させてダメージを与える。一撃必殺級の威力を持つが、ほぼ零距离で使用しなければならないという弱点を抱えている。

ツール

・ゼクトプレス

ザビー用の接続ツール。

銀色のプレスレットのような形状をしており、変身する際は左手首にはめる。

他と比べてコンパクトなため、リョウトは普段のアクセサリとして使うときもある。

【ドレイク】

二番目に開発されたゼクターデバイス。主な使用者はリョウト・クライン。

後発の三種とは異なり、デバイス本体をゼクトグリップに接続することで変身する。

防御力と射撃能力に優れ、遠距離戦を得意とする他、マスクドフォ

ームであれば水中戦も可能。

モチーフはトンボ（マスクドフォームはヤゴ）。

AIの性格設定は活発なボクっ子タイプ。

必殺技

・ライダーシューティング

本体のデバイスウイングを折りたたみ、後端にあるヒッチハンマーを引くことで使用可能になる砲撃魔法。
百発百中の精度を誇る。

ツール

・ゼクトグリップ

ドレイク用の接続ツール。

黒い拳銃のグリップのような形状をしており、トリガーを引くことでロックが外れ、本体の方から連結する。

断じて、SB製のアレのように電話としての機能はない。

【サソード】

一番最初に開発されたゼクターデバイス。主な使用者はリョウト・クライン。

ドレイクと同様に、武器とデバイス本体を接続させて変身する。

ガタツクと同等の攻撃力を持ち、専用武器であるサソードヤイバーを用いての剣戟戦闘を得意とする。

他の四種とは異なり、バリアジャケット内に常に魔力を循環させることで身体能力を向上させている。

その恩恵によって得られる高い動体視力により、やや低めの機動力を補っている。

モチーフはサソリ（マスクドフォームは昆虫の蛹）。

AIの性格設定は男勝りな姉御肌。

必殺技

・ライダーズラッシュ

デバイスニードルをマスクドフォームの位置に戻し、再びライダーフォームの位置に戻すことで使用準備が完了する。

魔力を刀身に集中させ、連続で斬りつける。

ツール

・サソードヤイバー

サソードの接続ツール兼、専用武器。

真っ直ぐな刀身をした刀の様な形状をしており、変身していない状態でも武器として使用可能。

【ガタツク】

ゼクターデバイスの中で最後に開発されたモデル。主な使用者はリョウト・クライン。

最後発だけあって全ての性能（瞬発力はザビーに若干劣る）が先行する四種類のゼクターデバイスを上回るか、互角。

特に攻撃力は秀逸で、肉弾戦だけでなく、専用武器であるガタツクダブルキャリバーを用いての剣戟戦闘も得意とする。

モチーフはクワガタムシ（マスクドフォームは蛹）。

AIの性格設定は人懐っこく、やや幼い。

リョウトのことを「お兄ちゃん」、彼の父であるアルフレッドを「パパ」と呼ぶ。

必殺技

カブトと同様にデバイス本体の脚に内蔵されたチャージボタンを押した後、本体の角、デバイスホーンをマスクドフォームの位置に戻し、再びライダーフォームの位置に動かすことで「Rider」の発声と共に発動状態となる。

・ライダーパンチ

カブトのライダーパンチと全く同じ技。

使用方法も手順も同じ。ただし、こちらの方が威力が高い。

・ライダースラッシュ

チャージボタンを「1、2」の順に押し使用する技。

専用武器、ガタツクダブルキャリバーを用いて相手を十字に切り裂く。

・ライダーキック

カブトのライダーキックと全く同じ技。

モーションは異なり、カウンターではなくこちらから飛びかかるようにして回し蹴りを放つ。

威力はカブトのそれを上回る。

・ライダーカッティング

ガタツクダブルキャリバーを交差させ、その状態で相手を挟み込んで両断する技。

リョウトいわく「人間相手には非殺傷でも使いにくい技」。

魔力で刃の部分をコーティングすることで切断力とリーチが強化されており、多少距離の離れた相手にも使用可能。

ツール

・ゼクトフォールド

ガタツク、カブトの接続用ツール。

カブト用のそれと共用している。

・ガタツクダブルキャリバー

左右一対の曲剣の様な形状をしたガタツクの専用武器。

魔力で刃をコーティングすることにより、チエーンソーと似た原理で目標を両断する。
マスクドフォーム時はガタツクバルカン内部に格納されており、キヤストオフした時にバリアジャケットの両肩にマウントされる形で使用可能となる。

オリジナルデバイス設定（後書き）

こちらにも、順次追加していく予定です。

第三話・雷と出会って、正体バレて……（前書き）

チート化の症状が進み始めます。そんな第三話です。

第三話・雷と出会って、正体バレて……

第三話・雷と出会って、正体バレて……

【Side Ryou to】

「うーっす」

次の日。俺は何事もなかったように、通っている私立聖祥大学附属小学校へ登校した。

「あ、おはようリョウト君！」

何故だか知らないが、俺を最初に見つけるのは大抵なのはだった。

「おう、おはよ、なのは」

「相変わらず無愛想ね、アンタ」

「こつこつ性分なんだ。だから勘弁してくれ」

「アンタねえ、それじゃあモテないわよ！」

「良いじゃねえか、人がどう生きようたって！」

「二人ともその位にしたほうが……」

で、俺の態度を見て決まってアリサが高確率で口論をふっかけて来て、それをすずかが思い留まらせるという構図が当たり前になってる。

「それより、私たちが知り合ったのも、ケンカが切っ掛けだったね」
「そうそう。アリサちゃんかすずかちゃんのカチューシャを取り上げて、私と掴み合いになっているところをリョウト君が止めに来て・

「・・・」

「それですずかが『やめて!!』って一喝したんだっけ？あの時はびっくりしたわ・・・」

「で、その後仲直りして現在に至る。“雨降って地固まる”を地で行く展開だったな」

すずかが言ったとおり、俺らの出会いは三年前のちょっとした争いから始まっている。

転生した身である俺にとっては、単なる子供のケンカと思っただが、掴み合いになりそうだったのでやむなく止めに入った。

で、すずかの性格の根底を垣間見た訳だが・・・。

「ほら、お前ら！授業始めっから、席に着け！」

「『はい!!』」

つと、ここで担任の先公が来たから俺達は席に戻ることにした。

と言っても、結構近くだからあまり意味がない気もするが・・・。

買い物からの帰り道。

俺とリニスは歩きながら雑談をしていた。

その道中で、ジュエルシードの事についても知っている範囲で説明した。

「リョウトは、今日は何が食べたいですか？」

「そうだな・・・ん？」

不意に、魔力の満ちる気配がしたので俺は周囲を見渡す。

「以前話していた、ジュエルシード……ですか？」

「ああ……。悪い、先に帰っててくれないか？」

「わかりました。では、怪我をしないように」

「分かっている」

リニスと別れた俺は、現場に走って向かう。

そこには、フランケンシュタインとムカデを足して二で割ったような、異形の怪人と、金髪の魔法少女が戦っていた。

「見た目の段階でパワータイプだな……。ドレイク、頼めるか？」

俺はゼクトレシーバーの水色のボタンを押して、ドレイクと接続ツールであるゼクトグリップを呼び出した。

《はいよー、ボクを呼んだ？》

「ああ、頼む。変身！！」

《Henshin》

ドレイクとグリップを連結すると、バリアジャケットが展開される。そして俺は、ヤゴを模したドレイク・マスクドフォームに変身した。

「くらえっ！」

「ガアア！！」

ガンモード時のカブトクナイガンのそれとは、比べものにならない威力の射撃魔法が放たれ、命中した怪人はそのばでたたらを踏む。

「っ、君は……。？」

「俺か？俺は……………」

金髪 フェイトの問いかけに、俺は砲撃魔法を撃ちつつ、いつものように答える。

「通りすがりの、正義の味方だ！」

放たれた砲撃はクリーンヒットし、相手の巨躯を数メートルほど吹っ飛ばす。

「一気に決めるか……………。ところで、お前の使い方は？」

《ボクとサソ姉（サソード）は結構シンプルだよ。ボクの場合は、後ろのヒッチハンマーをいっぱいまで引いて、トリガーを引くとキャストオフ。羽をたたんで、ヒッチハンマーを軽く引けば、ライダーシューティングが使えるよん！》

「なるほどな……………。よっと」

俺は後端のヒッチハンマーを引く。

すると、装甲がせり上がっていき、キャストオフの用意が完了する。

「キャストオフ！」

《Cast Off》

トリガーを引くと同時に装甲が排除され、ライダーフォームへの変身が完了した。

《Change, Dragonfly》

「さあて前振り無し、ここが勝負所だ！！」

俺は相手の繰り出す攻撃をギリギリの所で躲しつつ、射撃魔法をマ

シンガンの様に連射して攻撃する。
間断なく放たれる魔力の弾丸は怪人に全て命中し、着実にダメージを与えていった。

「すごいな、ドレイク・・・お前の射撃能力」

《まあ、ボクは遠距離射撃と防御が得意だからね。カブトとかじや耐えられない攻撃でも、ボクならダイジョービ！！》

「そうか・・・。えっと、そこのお前、名前は!？」

一応俺はフェイトのことを知ってはいるが、礼儀(?)として一応聞いておく。

「フェイト・・・フェイト・テストロツサ」

「じゃ、フェイト。援護を頼むぜ!!」

「・・・バルディッシュ、フォトンランサー！」

《Yes sir》

フェイトの放つ雷の矢を縫うように走り、俺はドレイクの翼 デバイスウイングを折りたたみつつ、ジュエルシードの思念体に突撃する。

「グオオオン!!」

「遅いつ！」

振り下ろされた腕を、俺は回避し、股下スライディングで背後に抜けると同時にヒッチハンマーを引く。

「残念だったな。ライダーシューティング!!」

《Rider Shooting》

必殺の砲撃魔法は、思念体を貫いて大爆発させる。

「はい、おしまいっと。早いところ回収して・・・って、あれ？」

俺はフェイトを探したが、どこにもいない。ついでにジュエルシードもなくなっていた。

大方、彼女が封印して持ち去ったのだろう。

《ぎゅんねん、フラれちゃったね、マスター！》

「余計なお世話じゃ、ボケ・・・。フェイトはもともと好きなキヤラだったか・・・リアルでみるとホントに可愛かったな・・・」

【side over】

【side Fate】

私は今の今まで、ずっと母さんのために戦ってきた。

ジュエルシードが、研究のために必要であると言われたから、輸送していた船を探して襲った。

それには失敗して、母さんには怒られたけど。

その後、落ちた場所をアルフと一緒に見つけ出して、回収に向かって、何とか4つほど集められた。

それで、5つ目を回収しようとしていた時のこと。今までは順調だったけど、今回は違った。

「グオオオオンー!!」

「くっ・・・強い・・・!」

目の前にいるのは、少なくとも2メートルはある、虫と人間を足し

て2で割ったような巨人。

射撃魔法は分厚い皮膚に弾かれ、サイズモードも刃が立たない。撤退も視野に入れようとおもったその時だった。

「くらえっ!!」

「ガアア!!」

誰かの撃った射撃が、敵をよろめかせた。

私は飛んできたほうを見る。そこには、何故か口の部分にパイプのある装甲型バリアジャケツトのようなものを着た魔導師（この段階ではまだ断定できなかつたけど）がいた。

「っ、君は……?」

「俺か?俺は……」

私の質問に、彼はこう答えた。

「通りすがりの、正義の味方だ!!」

その人はボウガンの様な形をしたデバイスから、今度は砲撃魔法を撃って思念体を数メートルほど吹き飛ばす。

『正義の味方』なんて、陳腐な表現だと思っていたけど、彼の实力を見るとそれが納得できてしまうから不思議。

「……よつと」

その彼がデバイスの後ろに付いているハンドルを引いたと思うと、装甲が徐々に浮き上がっていく。

「キャストオフ!」

《Cast Off》

そして、短く呪文のようなものを唱えると、次の瞬間には装甲が弾け飛んで、鮮やかな水色をした、左右非対称の本体が姿を見せた。

《Change, Dragonfly》

「さて、前振りは無し、ここが勝負所だ!!」

これが後に、私の大切な存在になる人との最初の出会いだった。

【side over】

【side Ryou to】

「駿河の〜お国〜は〜茶の〜かお〜り〜　　とと・・・うん？」

ある日、学校からの帰り道でのこと。俺はある独特の気配を感じた。魔力によって、結界が展開される気配だ。

「昼間で、方向はあそこの神社・・・ってことは、犬がジユエルシードと融合したあの場面か・・・。よし、行ってみるか」

いつものように(？)俺はなのはとユーノを手助けに向かうことにした。

「おいおい、これは一体どういう事だよ……！！」

草むらに隠れながら、様子を見ていた俺の目にはあり得ないものが映っていた。

そこにいたのはバリアジャケットを纏ったのはと相変わらず、フレットモードのユーノ。

ここまで俺の知っている原作通りだが、問題は彼女らが対峙している相手だ。

青と茶色の体を持った、犬と蜘蛛を合わせたような異形の怪人、アラクネアワーム・ハウンド（たった今命名）だった。

「よりもよってワームまがいのやつとは………。確か、蜘蛛系のワームはスピードに優れているから……ザビー、来い！！」

考える事は後だ。

俺はゼクトレシーバーの黄色いボタンを押してザビーと、彼女の接続ツールであるゼクトブレスを呼び出した。

《一体何用ですの？私はこれから優雅にティータイムを満喫するつもりでしたのに……》

「デバイスに紅茶の味がわかってたまるかよ。とにかく、変身だ！！」

《……わかりましたわ。けど、やるからには私を使いこなしてご覧なさい！》

「御託は後でゆっくり聞く。……変身！！」

《Henshin》

俺はザビーを左手首に装着する。

バリアジャケットが俺の魔力を使って展開され、蜂の巣を模したザビー・マスクドフォームに変身完了した。

「で、お前の使い方は？手短に頼む」

《……嫌ですわ》

「は？」

《いきなり呼びつけておいて、何ですの、その態度は？私はまだ貴方をマスターと認めた訳ではございませんわ！変身させてもらっただけありがたいと思いなさい！！》

「……んで、どうすれば俺をマスターとして認めてくれるんだ？」

《それは貴方の心がけ次第ですわ》

「そのためにもお前の全て（使い方）を知りたいんだ！教えてくれ！！」

《しっ……仕方ありませんわね……。キャストオフの時には羽を指先側にやって、私を180度回す。チャージボタンを押せば、ライダーステイニングが使用可能ですわ》

「ありがとな、恩に着るぜ！」

《かつ、勘違いしないで下さいませ！私を使いこなせないと分かった段階で、すぐにも切り捨てると覚えておきなさい！》

こいつ、やっぱりツンデレだ……。

意を決した俺は、草むらから飛び出してアラクネアフォーム・Hに体当たりする。

「今度は八手！？」

「手え貸すぜ、なのは！」

「はっ……はい！ 何で私の名前を知ってるんだろ……？」

「キシャアア！！」

そうこうしている内にアラクネアフォーム・Hが右腕の鉤爪を繰り出してきたので、俺はそれを腕を回して受け流す。

「はっ！でいつ！」

今度はこちらの番だ。

まず、俺は左ジャブを撃ち込む。

何発か顔にヒットさせた後、続いて俺は右フックを叩き込む。

「おらぁっ！！！」

そして、渾身の力を込めてブラジリアンキックを放ち、相手がそれを受けて吹っ飛ぶと同時に、ザビーのデバイスウイングを指先側に倒した。

指先から両肩、胸、そして顔の順に装甲が浮き上がり、準備が完了する。

「キャストオフ！！！」

《Cast Off》

そして、本体を180度回転させる。

針 デバイスニードルが展開されると同時に装甲が弾け飛び、ライダーフォームへの変身が完了した。

《Change Wasp》

「さあて、ダンスを始めるとするか！」

《私の動きに追従できるのなら、ですわ！！》

ザビーには手持ち武器は無い。

唯一の得物であるデバイスニードルも、ライダーフォームでしか使えない上に、防御力も他のゼクターデバイスと比べて低い。

だが、それを補って有り余るほどのスピードを活かした、肉弾戦が

真骨頂だ。

「おらおらっ！！」

俺はマスクドフォーム時とは比べ物にならないスピードでパンチのラッシュを叩き込み、最後に右正拳突きを食らわせてよろめかせる。

「はっ、でえい！！」

続いて、キックを連続して打ち込む。

右ロー、左ミドル、かかと落とし、締めには渾身のローリングソバットで相手を再び吹っ飛ばした。

「さて、止めといくか……なにつ！？」

俺がチャージボタンに手をやるとほぼ同時だった。

アラクネアフォーム・Hの姿が霞のように掻き消えたと思うと、次の瞬間には俺の体に、まるで車でもぶつかった様な衝撃が走る。

「こいつは……クロックアップ……！まさかそれまで使えるとは……。リスクは大きいが、やるしかないか……」

《リョウト、まさかクロックアップを使う気ですか！？》

「ああ。四の五のは言ってられねえ。もしものときは、制御頼む！」

「あの、今のは……？」

なのはが恐る恐る質問してきたので、俺は答えた。

「今のはクロックアップ。周囲の時間に干渉して、一時的に流れを遅くすることで高速移動が可能になる魔法だ。俺も使えるが、リスクが大きい。巻き込まれなくなければ、そこから動くなよ！！」

俺はバックルの脇にある金具に手を触れる。そして、それをレールに沿って右側にスライドさせた。

「クロックアップ！」

《C r o c k U p》

クロックアップが発動し、周囲はうつすらと明るみを増したような景色に変化する。それと同時に、時間の流れも変わった。

空を飛んでいた鳥は、『空中で』その羽ばたきを止め、周囲を歩いていたOLやサラリーマン、学校帰りの学生達は、それまでとっていた姿勢のまま静止する。

「これがクロックアップした世界・・・天道や彼の友、カ・ガーマンが見ていた景色か・・・！！」

《時間がありませんわ。急ぎなさい、リョウト！！》
「わかってるっての！」

相手がクロックアップを使ったことに動揺したのか、その場で棒立ちになるアラクネアフォーム・Hに俺は再びパンチとキックのラッシュを叩き込んで相手を吹っ飛ばす。

「ライダーステイング！」

《R i d e r S t i n g》

俺は走って距離を詰めつつ、ザビーの羽の付け根にあるチャージボタンを押して魔力をデバイスニードルに集中させる。

「チエストオオ！！」

「！！！！！！！！」

そして、跳躍してアラクネアワーム・Hの胸に突き立てた。込められた魔力がアラクネアワーム・Hの体内で開放され、耐えられなくなった相手の体は大爆発を起こす。

その場にはジユエルシードと、融合してしまっていたであろう、黒い子犬が残された。

《Crock Over》

それと同時にクロックアップが解除され、周囲の時間はまるで何事もなかったように、流れ出す。

「ぶはあつ……!つ、疲れた……」

《忠告したのに、無視した報いですわ。では、私はこれで失礼しますわね》

「あつ、ちよつ、待って……」

俺が草むらに逃げようとする前に、ザビーが勝手に左手から離れ、強制的に変身が解除されてしまう。

「……」

「……」

やべえ、すっかり忘れてた。なのはとユーノもこの場にいたんだっ
た……。

「とりあえず、説明して欲しいの」

「……はい……」

その時のなのはの笑顔は、いつになく明るく、いつになく凄みがあ

つ
た。

第三話・雷と出会って、正体バレて……（後書き）

【お知らせ】

デバイス設定に「ザビー」、「ドレイク」、「クロックアップ」を追加しました。

第四話：成り行きで、協力することになった

立ち話も何なので、俺はなのはとユーノと共に俺の家に向かった。

「んじゃ、説明すつぞ・・・」

とりあえず、俺はリニスが入れてくれたお茶を飲んで心を落ち着かせる。

そして、俺は彼女に話せる全ての事を話す。

自分がこの地球とは違う、別の世界の出身であること。

ザビー以外にもデバイスを所持していること。

そして、前世の記憶を持って生まれてきた転生者であること・・・

「なるほど・・・僕達の事を物語として知っていたなら、その行動にも納得が行く」

「その通りだ。本当は、なのはを影ながらサポートしようと思っていたんだが・・・今回のようなパターンも現れないとは限らないし、何より・・・」

俺はなのはを見て、続ける。

「お婆ちゃんは言っていた。『世の中に、友達を助けちゃいけない理由はない』ってな。こうなったら一蓮托生、俺も手伝っぜ、ジユエルシード集め」

「で、でもこれ以上一般人を巻き込むわけには・・・ムギユツ!？」

フレットモドキが何か言っていたようだが、俺はそいつの頭を掴

んで発言を遮る。

「ダチが困ってるのを見捨てるなんて、シャバい真似ができたかよ」
「リヨウト君……」。うん、ありがとう！」

協定成立。

こうして俺達は、協力してジュエルシード回収をすることと相成った。

それから何日かはジュエルシードの発現もなく、俺となのはは空いている時間を魔法の練習に費やすことができた。

そんなある日のこと。俺、なのは、アリサ、すずかの4人は土郎さんがオーナー兼監督の少年サッカーチーム、翠屋JFCの試合を見に来ていた。

スコアは1対1、一進一退の攻防が続いている。

なのは達は頑張って応援しているが、どうも俺はそんな気分になれなかった。

「しかし、まあよくやるぜ……」

「何よ。少しは声援送ったらどうなの？」

「野球だったらもうチョイ乗れた。つと、あらら。こっち（翠屋JFC）の選手が一人負傷退場か……」

「大丈夫かな……」

「リヨウト君、ちょっと良いかい？」

すると、土郎さんが俺のことを呼んだので、何事かと思っ行って見たら……

「悪いけど、代理で出てくれないか？控えがなくなって困っているんだ」

「……良いですよ。じゃあ、ユニフォーム貸してもらえます？」

両手を合わせて頼んでくるから、思わず引き受けてしまった。

俺は車の中でユニフォームに着替えて、ピッチに立つ。前世の小学生以来だ……。

すると、ホイッスルが吹かれて試合が翠屋ボールで再開する。

巧みなパスワークで相手のゴールを狙うが、相手チームのキーパーは手練れらしく、なかなか決められないでいる。

そうこうしている内に試合時間を使い切り、後半のロスタイムに差し掛かったその時だった。

相手チームがファウルをもらい、PKのチャンスを得る。それを蹴るのは、なぜか俺。

「……………どうしてこうなった……」

臨時の補欠の俺が蹴って良いのか悩んだが、よくよく考えてみれば中々におもしろそうな状況だった。

「ま、ハズしてひんしゃく颯感でも買うとしますかな。そらよつと!!！」

外すつもりで蹴ったボールは、見事なカーブを描いてゴールの内側に吸い込まれ、そのネットを揺らした。

「ありや、入っちゃった……………」

結局、これが決勝ゴールになって試合は翠屋JFCの勝利に終わった。

その後、チームは翠屋で祝勝会を開いていた。（もちろん、士郎さんのオゴりだ）
ちなみに俺たちは、通りに面したテラス席にいた。

「それにしても、拾ったときから気になってたんだけど・・・」

不意に、アリサが意味深なことを言い出した。

「ユーノって、ホントにフェレットなの？獣医の先生も『診たことがない種類だ』って言ってたし・・・」

「・・・！！」

わかってはいたが、俺は寿命が縮むかと思った。なのはに至ってはツインテが一瞬跳ね上がった。

「か、変わったフェレットさんなんだよ！外国の、珍しい種類の！」

「そ、そうそう、いわゆる『珍種』って奴だ！」

かなり苦しい言い訳だが、俺はそれしか言えることが思いつかなかった。

おそらく、なのはも同じことを考えていたのだろう。

「ふーん、珍種ねえ・・・」

どうやら納得してくれたらしく、アリサは再びユーノを弄りだした。

「キュ、キュー！（た、助けてー！）」

許せ、ユーノ・・・

助けを求める声が聞こえた気がしたが、ほっとしておこう。

「今日は一日お疲れ様！ゆっくり休んで、英気を養ってくれ。それじゃあ、解散！」

「『はい！』」

どうやら、中の方はお開きとなったらしく、続々と子供達が店から出ていく。

「・・・うん？」

一瞬、弱い魔力の反応を感じたので、俺は周囲を見渡しつつ、集中力を高める。

すると、メンバーの一人のバッグの中にジュエルシードが入っているのを見つけた。

とりあえず、俺はなのはに念話で伝える事にする。

・・・なのは

何？

ジュエルシードを見つけた。あの青いバッグの奴が持っている
それで、どうするの？

しばらく泳がせて、発動したら一気に確保しよう。この状態で魔法を使うわけにはいかないからな
了解！

その後、俺たちも解散し、俺はなのはと共に彼の後を付けることにした。

現場近くにあるビルの上に登った俺たちの目に入ったのは、天を衝くような高さにまで伸びた大木だった。それも、山の中ではなく、街のド真ん中に。

「なあ、ユーノ。ジュエルシードって、願いを叶えるために力を発揮するんだろ？なら、これは一体……？」

アニメで知ってた俺でも、開いた口が塞がらなかった。それだけのインパクトがアレにはある。

「多分だけど、その男の子には好きな女の子がいて、『その子と一緒にいたい』という願いにジュエルシードが反応したんだと思う。今はまだ大丈夫だと思うけど、ほっとくと危険だ」

「んなこと言ってたって、このサイズじゃそのペアがいる場所を探すのにも一苦労だぜ？」

「なら、私に任せて！ユーノ君とリョウト君はサポートをお願い！」

《Flyer fin》

何か思いついたのか、なのはは、フライヤーフィンで上空に飛び上がり、レイジングハートを構える。

《Sealing mode, standby ready》

「リリカル、マジカル、ジュエルシード、シリアル??、封印！」

彼女が呪文を詠唱したかと思うと、杖の先端から桜色をした光の帯が放たれる。

それは際限なく伸び続け、大木の幹に巻き付くと、それと同時に大木は光に包まれて消滅し、彼女の手元にジュエルシードが飛んできた。

中にいた二人は、無事のようだ。

《Sealing》

「・・・ふう・・・」

「・・・なあ、なのは」

賢者モードに入っているのはに、俺は話しかける。

「よくあんなサイズの奴を押さえ込めたな・・・すげえよ、お前」
「うーん、ユーノ君の教え方が上手いから、かな？」

今更ながら、なのは（コイツ）の才能は底が知れない。StSで『白い魔王』なんて呼ばれるわけだけ、これは・・・。

その次の日曜日。俺となのは、アリサと恭也さんは月村家。つまり、すずかの自宅に招かれた。

移動する道中、バスの中で恭也さんは服の襟元を正したり、窓を鏡代わりに髪型を整えたりと、何だかソワソワしていた。

「ようこそいらっしやいました、恭也様、なのは様、アリサ様、リョウト様」

出迎えてくれたのは月村メイドシスターズ（勝手に命名）の姉、ノエルさんだった。

礼儀正しく、メイド服のスカートの両端を摘んでお辞儀する。その滲み出る気品・・・うん、模範的だ。

「ノエル、今日は世話になるよ」

「『おじやましーす』」

その後、俺たちは奥にあるサンルームに通された。中には白いテーブルと人数分のイス。そしてかなりの数の猫、猫、猫……。

イスの一つには、さすがが。もう一つには彼女より一回り年上の、同じく瑠璃色の髪をした女性。忍さんが座っていた。

「いらっしやい、恭也」

「やあ、忍。久しぶり」

「もう、先週逢ったばかりでしょ？」

「そうだったか？」

会話から察するに、二人の仲は結構良いらしい。……リア充は滅んじまえ……。

「ニヤー（お前、面白そうだな）」

「キュー！（た、助けてー！）」

なのはが連れてきたユーノはというと、トラ猫に追い回されている模様。何とも微笑ましい（本人は必死だが）光景だった。

「はい、お待たせしましたー！お紅茶と、お菓子でーす！」

すると、サンルームの扉を開けて月村メイドシスターズの妹、ファリンがティーセットの載ったトレイを持って現れた。

「ニヤーゴー！」

「キューー！」

「えっ！？えっ！？」

それと同時に、ユーノが彼女のいる方へ逃げ、トラ猫もそれを追って彼女の足元で追いかけてつこを始めてしまう。

「へ、へ口へロー……」

嫌な予感がする……

それを避けようと下を見ていたファリンは案の定、目を回してしまい、トレーを持ったまま後ろに倒れかける。

俺は考えるよりも先に飛び出していた。

左手でトレーを受け止め、右手で彼女の背中をキャッチする。ていうか、重っ！？小学生の体じゃ辛かったか……。

「おお……！」

「せ、セーフ……？」

「見てる暇があったら手伝ってくれ……！」

その後、俺は恭也さんの助けを借りてファリンを何とか起こした。彼女はただただ、俺に平謝りしていたが……。

「……」

「……」

「……じゃあ、俺から行くぞ？」

暇だったので、アリサの発案で俺たち（なのはと恭也さん以外）はポーカーをしていた。

ちなみに、俺の手札は右手からスペード、クラブ、ハートの3とダ

イヤの4と9だ。

「よし、スリーカードだ」

「ふふん、甘いわね。フルハウス！」

「げ……！」

アリスの提示した手札は5のスリーカードと8のワンペア。俺の約より一つ上だ。

こうなったら、最下位だけは脱しないと……。すずかの手札に期待だ……！

「えっと……これって……」

おそろおそろ彼女が見せた手札は……

スペード10、スペードJ、スペードQ、スペードK、スペードA。まごう事なき、ロイヤルストレートフラッシュ。最強を出しやがった……！

「嘘だ……ウソダンドコドーン……！」

「ど、どうしたのよ！？奇声なんて上げて……！」

俺としたことが、ショックのあまりオンドウルってしまった。猛省せねば……。

「………?」

と、ここでジュエルシードが発現した際に出る、独特の魔力を感じる。

なのは、ユーノ、ジュエルシードだ

うん、私も感じた。でもどうやって抜け出せば……
じゃあ、僕が囿になって外に出るよ。二人はついてきて！
わかった

うん！

打ち合わせ通り、ユーノが中庭に通じる扉から外へ飛び出す。

「あ、ユーノ君、何処行くのー！」

「ったく……悪い、なのはと一緒に探してくるわ」

すずかとアリサに断りを入れて、俺となのははユーノを追って外へ出る。

少し走って、庭の外れにある林の中で合流し、まずユーノが封鎖結界を張った。

「さてと、何処にいるかだが……」

「リョウト君、あそこー！」

なのはの指さした先には『巨大な』子猫がいた……

「えっと、これって……」

「たぶん、あの子猫の『大きくなりたい』っていう願いをストレートに叶えたんだと思うけど……」

「ちよつと安直過ぎやしないか、これは？まあ良いか。取りかかるぞ、ドレイク！」

《はいよー、張り切っていこー！》

「レイジングハート、お願い！」

《All right, master. Standby read
y》

俺はゼクトレシーバーでドレイクとゼクトグリップを呼び出し、なのはもレイジングハートを起動させる。

「変身!!」

《Henshin》

「セット、アープ!!」

「よし、俺がバインドで動きを止めるから、なのははその隙に封印を頼む」

「うん!!」

俺はドレイクの狙いを子猫（と、言って良いのだろうか？）に定め、バインド魔法を放つ。

放たれた魔力弾は当たる寸前でリング状に広がり、ターゲットを拘束する。

「今だ、なのは!!」

「うん!!リリカル、マジカル、ジュエルシールド、シリアル……」

「

その時だった。金色の、見覚えのある魔力の矢がデカ子猫に降り注いだ。

「なつ、何!?何なの!?!」

「っ、あれは……!」

俺は魔法が飛んできた方を見ると、懐かしい顔に出会った。

腰まで届く、月光のように輝く金髪。雪のように白い肌に真紅の瞳。淡紅色のマントと、漆黒のバリアジャケット。そして、黄金の宝玉を埋め込まれた斧槍。

間違いない、フェイト・テストロツサ本人だ。

「・・・あの時の・・・」

「お前も、これが目当てか？ジュエルシードを持った、こいつが」

俺はデカ子猫を指さして、フェイトに問いかける。

「・・・フotonランサー、アサルトシフト・・・」

《Yes Sir》

彼女は表情一つ変えず、再び射撃魔法を猫めがけて放つ。

「止めてー！！」

その次の瞬間。猫をかばってなのはが射線に割り込み、魔力弾の内の一発が彼女に直撃してしまった。

「きゃああっ！！」

「なのは！！」

あわや地面に激突！・・・かと思われたが、間一髪の所でユーノが魔法で受け止めていた。

「・・・お前・・・！」

「・・・あなたも、死にたくなければこれ以上首をつっこないほうが良い・・・」

その隙にフェイトはジュエルシードを封印、空の彼方へ飛び去ってしまった。

いつでも撃てた。なのに何もできなかった。

そんな自分が悔しくて、俺は地面に拳を打ち付けた。

その後、なのはを背負って戻った俺は、彼女を手当てしてもらった。その際、恭也さんに根掘り葉掘り聞かれたが、とりあえず『木の根につまづいて、すっ転んで気絶した』と言い訳しておいた。

「ねえ、リョウト君……………」

帰りのバスの中、なのはが俺に話しかけてきた。

「なんだ？」

「あの子、どう思った？」

「ああ、あの金髪フュイトか…………それがどうかしたか？」

「あの子、とても悲しい目をしてた。お父さんが怪我して入院して、お母さん達が忙しくて、なかなか帰って来れなかったときの、私の目みたいに……………」

「……………」
「きっと、何かあるんだと思う。だから、次に会ったときに、お話を聞かせてもらう……………」

彼女の瞳には、決意の炎が燃えていた。

俺の知っているリリなのの世界と違って、なのははやっぱりなのはだ……………」

第四話・成り行きで、協力することになった（後書き）

なのはとフェイトのファーストコンタクト、そんな第四話でした。

心なしか、描写が薄い気もするけど……。。

第五話：俺たちは、まだ知らないことが多過ぎる……

ジュエルシード、翠屋のスイーツと並んで、無印編を語る上で欠かせないもの。

それが高町家、月村家、バニングス家の三家族合同温泉旅行だ。

海鳴市は住宅地や商店街だけでなく、郊外に足を向ければ温泉や大型のレジャー施設など至れり尽くせりの街で、その温泉へ一泊旅行に行くのが恒例となっていた。

だが、今回は少し事情が違って俺とリニスも、招かれたのだ。

「すみません、俺やリニスまで誘っていただいて……」

「何、人数が多い方が賑やかで楽しいからね。今日はゆっくり寛ぐと良いよ」

俺が乗っているのは、土郎さんが運転している車の後部座席。助手席には桃子さん、両隣にはなのは、アリサ、さすがが座っていた。(リニスは人数の都合上、ノエルさんの運転している車に乗っている)

「……狭い……」

「何よ。カワイイ女の子に囲まれて、嬉しくないの？」

「ガキに囲まれても嬉しくねーよ」

「何よ！アンタだつて子どもじゃないの！」

「その台詞は鏡を見てから言ってこい！」

「二人ともそのくらいで……」

車中だから俺もアリサも抑えてはいるが、やっぱり言い争いになってしまう。止めるすずかにも迷惑をかけているし……

小一時間後、海鳴温泉に到着し、なのは達女性陣はバスセット片手に早速一っ風呂浴びに向かった。

少し経ってから俺も、土郎さんと恭也さんと一緒に入ることにした。

「リョウト、少し聞きたいことがあるんだが、良いか？」

「はい？」

不意に、恭也さんが話しかけてきたので俺は頭を洗いながら対応する。

「なのはの事、どう思っている」

「・・・そりゃあ、まあ・・・友達だと思ってますよ」

「それなら良いが、もしそこから先に行くつもりなら・・・」

「行くつもり・・・なら・・・？」

「君に大いなる試練が訪れるだろう・・・」

「・・・覚えときます」

そういえばこの人、シスコンでもあったな・・・。。くわばら、くわばら。

「こらー！逃げるんじゃないわよー！」

「ユーノ君待ってー！」

「キュ、キューー！ー！！（こっち来ないでー！！）」

そして、フェレットの姿をとったまでに、生き地獄へ行くことになったユーノに合掌・・・。。

日頃の疲れ（小学生なのにこの表現はどうかと思うが・・・）を洗い流した俺は、なのは達三人と合流して旅館の中を探検していた。現在地は中庭を臨む縁側、なかなか良くできた日本庭園だ。

「おやおやく？」

と、ここで誰かが話しかけてきた。

俺達が後ろを向くと、そこには何ともグラマラスな赤毛のお姉さんがいた。

このタイミングから察するに、アルフか。・・・近くで見るとデカいな、胸・・・

何で胸のことを言ったかって？前世でも今でも胸フェチだからですか何か？

「アンタかい、ウチの子にちょっとかい出してくれたのは？」

「あ・・・その・・・」

どうやら、ターゲットはなのはらしい（よくよく考えたら、俺のバリアジャケットはどれも顔まで隠れる仕様だからな・・・）。

「全く、おとなしく見ていれば良いのに、手を出すから痛い目に遭うんだよ。今度しゃしゃり出てきたら・・・」

「しゃしゃり出てきたら、どうするんですか？」

「もちろん、ガブツと・・・って、リニス！？なんでこんなところに!？」

いつの間にか、彼女の背後にリニスが立っていた。さすがは猫の使

い魔と言ったところか。

「それで、誰をガブツと行くんですか？」

「い……いや、それはその……言葉のアヤと言うヤツで……」

「ふむ……では、その意図を聞かせてもらいましょう。じっくり、丁寧に」

どうやら、パワーバランスはリニスの方が圧倒的に上らしい。

彼女はアルフの浴衣の後襟を掴むと、そのまま引きずっていった。

「待って！後生だから『アレ』だけは勘弁して……きゃいーん……！……！」

角を曲がると同時に響く、アルフの断末魔。俺は心の中で合掌した。ていうか、『アレ』って何なんだ？

97

その日の夜。ジュエルシールドの発動を察知した俺達は宿の裏山に向かった。

そこにいたのは、バリアジャケット姿のフェイトと、アルフだった。

「よう、また会ったな」

「……」

「お話、聞かせてもらうのー！」

……なのはレイジングハートを起動させ、飛び立とうとしたところ……

「まったく、あの時忠告したってのに……。しゃしゃり出てきたら、ガブツと行くってさー!!」

それよりも早く、アルフが狼形態に変化して彼女に飛びかかってくる。

「させるかつ!」

「ぐうつ!?!」

相手の意図を察知した俺は、横蹴りをアルフに食らわせて彼女を吹っ飛ばし、それと同時にゼクトレシーバーの紫のボタンを押した。

「お前の相手は俺だ。来い、サソード!」

《私の出番かい?》

「ああ、頼む!」

俺は地面に手をやる。すると、そこにミッド式の魔方陣が現れ、そこから専用武器のサソードライバーが転送される。

《Standby》

「変身!」

《Henshin》

ジャンプしたサソードを左手で受け止め、ライバーの鏢に当たる部分に彼女を連結させる。

バリアジャケットが展開され、昆虫の蛹を模したサソード・マスクドフォームに変身が完了した。

「さて、行くか!」

「おおおお!」

俺はアルフの繰り出す攻撃をかわしつつ、隙を見てヤイバーで反撃する。
非殺傷とはいえ、生き物を斬るのは正直気が引けるが、手心を加えれば手痛い一撃をもらう破目になるので容赦はしない。

「チエストオ!!!」

「ふん、甘いよ!」

「ちいつ!」

袈裟懸けに振り下ろしたヤイバーはアルフが展開した防御魔法に阻まれ、逆に体当たりを受けてしまう。

装甲のおかげでダメージこそ低いが、そう何度も受けられるものではないだろう。

頃合を見て、俺はサソードの尻尾を押し込んで、デバイスニードルを彼女の背中に差し込む。

両肩と胸の装甲、そして特徴的な腕のケーブルと顔のバイザーが浮き上がり、準備が完了した。

「キャストオフ!!!」

《Cast Off》

そして、短く呪文を詠唱する。

装甲が弾け飛ぶと同時に両肩のショルダーブレードが露出してライダーフォームへ変身する。

《Change Scorpion》

「さて、お前を退治してやる!」

「やれるものなら、やってみな!」

人間形態に戻ったアルフが、両拳を魔力で包んで殴りかかってくる。俺はそれを冷静にヤイバーで受け止め、空いた腹に膝蹴りを食らわす。

そして、相手が怯んだところを力任せに得物で薙ぎ払ったその時だった。

「きゃあああ!!」

「のわっ!?!」

フェイトのサンダーレイジの直撃を受けたのはが吹っ飛んできて俺と衝突する。

「てててて……」

「いたたた……」

「……いくよ、アルフ」

「あいよ」

フェイトは悠々とジュエルシードを封印すると、そのままアルフと共に飛び去っていった。

「……」

「……なのは、元気出せよ。今日は相手が悪かったと思ってさ……」

「……」

「うん……」

宿までの帰り道。完敗したなのはは、すっかり落ち込んでしまっていた。

俺は彼女を励まそうと言葉をかけるが、あまり効果が無かったよう

だ。

「ねえ、リョウト君・・・」

「なんだ？」

「私、強くなる。強くなって、今度こそあの子とお話する・・・！
だから、手伝って！」

どうやら、何かに火が着いたらしい。

以前見たときよりもさらに瞳が燃えていた。

「・・・お安いご用だ。俺で良ければ、いくらでも力になる。だっ
て俺達・・・」

「『友達だ』、でしょ？」

「そう言うこつた」

そう。まだ、始まったばかりなのだから・・・。。。

第五話：俺たちは、まだ知らないことが多過ぎる……（後書き）

なのは、フェイトに二度目の敗北。そしてサソードは不発。
そんな第五話でした。

第六話・それぞれの思い（前書き）

主人公成分は今回ちょっと薄め。そんな第六話です。

第六話：それぞれの思い

【Side Ryou to】

ある日、ジュエルシードの反応を感知した俺となのはは夜の聖祥小に来ていた。

普段見慣れている廊下でも、夜の帳が落ちるとまた違った印象になるから不思議だ。

「ねえ、リョウト君・・・なんか出そうじゃない・・・？」

なのははと言うとさっきから俺の後にくっついてる。

こいつ、お化けの類が苦手だったのか・・・？

「お婆ちゃんは言っていた。『良い物は望まなかった分だけ、悪い物は望んだ分だけ出会いやすくなる』ってな。ビクビクしてるから出るんじゃないのか？」

「・・・そうかな・・・？」

その時だった。水道の蛇口から水滴が落ちる。

普段なら意識しない音だが、他に音を立てるものがない今はそれが異様に大きく響き渡る。

「ひゃあ！？出たあ！？」

「ああ、出たな・・・！！」

「#?¥@あーjkふじこ!？」

「落ちて着け、ジュエルシードだよ!!!」

俺達の前に狼男のような姿に変化した思念体が現れた。

「狼さんが・・・キュウ・・・」

「あ、おい、なのは・・・？」

遂に限界に来たのか、なのはは気を失ってしまった。

向こうはそんなことはお構い無しに攻撃してくるので、俺はそれを防御魔法を展開して受け止めた。

「ったく、しゃあないな・・・来い、サソード！」

なのはを物陰にやった俺は、サソードとサソードヤイバーを呼び出して後に飛び退く。

《あいよ、出番だね》

《Standby》

「変身！」

《Henshin》

俺はサソード・マスクドフォームに変身して思念体に斬りかかった。

「でえい!!！」

振り下ろした刃は相手の大きな手に阻まれる。だが、それも計算の内だった。

「避けなかったのが、お前の間違いだぜ！」

俺は額のジャケットアンテナを伸ばして、先端の針を相手の目に突き刺した。

そこが急所だからかどうかはわからないが、あまりの痛みに相手は顔を手で覆ってその場から後ずさり、窓ガラスを割って校庭に飛び出した。

「逃がすかよっ!!」

それを追って俺も校庭に踊り出で、地面に着地すると同時にデバイスニードルを本体に差し込んでキャストオフの準備をする。

「キャストオフ!!」

《Cast Off・Change・Scorpion》

「おおおお!!」

ライダーフォームへの変身が完了し、身軽になった俺は一足飛びに距離を詰めてヤイバーで思念体を斬りつける。そして空いた左手でパンチを見舞い、相手を吹っ飛ばした。

「ライダースラッシュ!!」

《Rider Slash》

相手が地面に倒れたのと同時に、デバイスニードルをマスクドフォームの位置に戻し、再び差し込んで刀身部に魔力を集中させる。

「チェストオオ!!」

そして、跳躍して頭からソードヤイバーを振り下ろし、さらに着地と同時に真一文字に切り裂く。

綺麗に四刀分された思念体はバラバラになって消滅し、安定状態になったジュエルシードのみが残された。

「封印、つと」

《Sealing》

「さて、あいつを起こしに行くとするかな・・・」

とりあえず、サソードの中にジュエルシードを封印した俺は、なのはを起こすべく校舎の中へと戻っていった。

「う・・・ん・・・」

「気がついたか？」

家までの帰り道、俺に背負われていたなのはが目を覚ました。

「あれ・・・リョウト君、私・・・」

「ジュエルシードは封印済みだ。サソードに持たせているから、後で受け渡しな」

「・・・うん」

「そんなことより、お化けの類が苦手なら無理せずそう言ってくれよ。校舎の前で待っていてくれれば、俺が外に追い立てることもできたってのに・・・」

「・・・うん・・・ごめん・・・」

「気にすんな、過ぎたことだ」

「それと・・・そろそろ降ろしてほしいな・・・」

「つと、悪い」

ちょうど分かれ道に来たので、俺は地面にしゃがんでなのはを降ろした。

「んじゃ、また明日な」

「うん。おやすみ」

。やれやれ、早いところ帰らないと・・・補導されちまう・・・

それから何日か経った日曜日。

俺は ビー ジャ ンの新刊をチェックするために図書館へとやってきた。

「あ。おい、リョウトくん！」

すると、入ってくるのを見つけたのか、はやてが車椅子を転がして近づいてきた。

「久しぶりやわ」

「そうか？最後に行ったのが2ヶ月前だから・・・それほど経ってないようにも思えるが？」

「2ヶ月も経ったんから、久しぶりの領域や」

「・・・そういうもんか？」

「そういうもんや」

このおっとりした空気・・・これが十年後には、権謀術中をフル活用して機動六課をつくった張本人と同一人物とはとても思えん・・・

「お？なんや、はやて。友達かいな？」

ふと、ハキハキした声が横から聞こえたので、声のした方をみると、

はやてと瓜二つの少女がいた。
目元に泣き黒子があるのと、髪型がサイドテールである点を除けば、ほとんど見分けが付かないくらいそっくりだ。生き写しと言っても良いだろう。

「あ、凧沙姉。今、リョウト君とお話してたんよ」

「はじめまして、リョウト・クラインだ。よろしく」

「ウチは八神凧沙や。よろしゅう頼むで」

なるほど、はやてが京風なら彼女は大阪風か。随分わかりやすいな。

「せやけど・・・見た感じ軟派な面構えやな」

「それ、結構気にしてんだが・・・」

【Side over】

【Side Fate】

一つしかない月が昇り始めた頃、私とアルフは拠点にしている高層住宅の屋上にいた。

「うーん、このあたりにあるのは間違いないんだけどね・・・」

「まだ小康状態だから、詳細な場所の特定は難しい。だったら、軽く驚かして、一瞬だけ発動させればいい。そのための術式は・・・」

「はい、ストップ。その発動はあたしがやるよ。思念体との戦闘もあり得るからね、魔力は温存しときなよ？」

「アルフ・・・ありがとう」

「あたしはフェイトの使い魔さね。この位は当然だよ」

そう言つて、アルフは足下に魔方陣を出して術を発動させ、私は素早く探知するために両目を閉じて集中力を高める。私たちがいる所を中心に、魔力が波紋のように広がっていき、周囲に微弱なシヨックを与えていく。次の瞬間だった。魔力の中に、不協和音のようなものを感じたのは。

「・・・感じた。10時の方向、街のほぼ中心。行くよ、アルフ・・・！」

「おっし！それじゃあ、行こうか！！」

反応のあつた場所に着く頃には、誰かによつて結界が張られていたらしく、周囲には人っ子一人いなかった。

『あの二人』を除いては・・・。。。

「よう、また会つたな」

「君は・・・」

「今日こそ、お話聞かせて！」

「・・・フェイト・・・。」

「え・・・？」

「フェイト・テスタロッサ。君達は・・・？」

「私は、高町なのは！」

「俺はリヨウト・クラインだ。悪いが、ジュエルシードはこっちにも必要な代物なんでな、渡してもらうぞ。ドレイク、来い！！」

《ムフフ、ボクの本気、見せちゃう？》

「俺の気が向いたらな。変身！！」

《Henshin》

「レイジングハート、お願い！！」

《All right, Master. Standby read

y

なのはと名乗った女の子は白いデバイスと純白のバリアジャケット姿に。

リョウトと名乗った男の子はボウガンのようなデバイスと、見覚えのあるバリアジャケット姿になる。

「その姿……」

「騙っていたつもりは無いんだが、今の俺はなのはの味方だ。悪く思っなよ」

私は、相手が行動する前に攻撃に移る。

事情はどうであれ、二人は今は敵なのだから………。

【Side over】

【Side Nanhaha】

あの子、フェイトちゃんが名乗ってきたことにも驚いたけど、リョウト君があの子と知り合いだったのにも、私は驚きを隠せなかった。

「なのは、フェイトの相手、頼めるか？」

「うん！」

「じゃあ、任せたぞ！」

そう言ってリョウト君は、デバイスから弾丸を連射しながら赤い狼さんに突撃していく。

「フェイトちゃん、今日こそお話、聞かせてもらえる？」

「……話すことはない……。行くよ、バルディッシュ」

《Yes sir》

フェイトちゃんが魔法を撃って攻撃してくる。

《Flyer Fin》

私はフライヤーフィンで飛び上がり、レイジングハートをシューティングモードに変形させて反撃する。

《Acceler shooter, standby ready》

《Photon runner, set up》

「シュート!!」

「ファイア・・・!!」

ピンクと黄色、二つの魔法の弾丸がぶつかり合って、私たちの間を爆風と煙が通り抜ける。

「はぁあぁっ!!」

「くっ・・・!!」

その煙を割って、フェイトちゃんがデバイスを鎌のように変形させて突っ込んでくる。

私はそれを咄嗟に展開した防御魔法で受け流して反撃しようとするけど、むこうはその手を読んでいたみたい。

黄色い刃を投げて攻撃してきた。

「フルシュート!!」

私はもう一回アクセルシューターを、今度は連射して飛んできた刃を撃ち落とす。

「もらった・・・!」

《Accelerate move》

「っ・・・!?!」

不意に、レイジングハートがアクセルムーブを発動したので、私は適当な方向に移動する。一瞬の隙を突いて、フェイトちゃんが斬りかかっていた。

「うわっ・・・やべえぞ!!」

「ちよっ、何てことしてくれたんだい!!」

不意にリョウト君と、赤い狼さんの声がしたから、下を見つめる。すると、ジュエルシールドが発動寸前の状態になっていた。

「どうしたの!?!」

「俺のミスだ!間違っってライダーシューティングを当てちゃった!

「!」

「なのは、リョウト、ここは危険だ!すぐに逃げよう!!」

「う、うん!!」

「合点承知の助!!」

私たちは一目散に逃げようとしたけど、何故かフェイトちゃんはジュエルシールドの方に向かっていく。

「フェイトちゃん!!」

「あ、おい、なのは!?!」

止めなくちゃ。そんでもって聞かなくちゃ。

どうして、ジュエルシールドを集めているのかを……………。

【Side she】

管理外世界への巡航任務のため、乗り慣れた戦艦^{ぶいね}で本局を出発してからはや一週間。

艦橋の窓に写る景色は、代わり映えのない次元空間。大っぴらにだらけるのは柄ではないけど、いくら私でも退屈してくる。

「お疲れ様です、艦長。お茶が入りましたよ」

小腹が空いたのでビスケットを摘んでいると、エイミーさんが緑茶の入った湯飲みを持ってきてくれた。

「ありがとう」

私はそれを受け取って、砂糖とミルクを入れてかき混ぜる。一口飲むと、何とも言えない独特の甘味が口の中に広がっていくのを感じる。

この瞬間が一番幸せだわ……………。

「それにしても、ヒマですね。何かこう、次元世界を揺るがす事件みたいな、起きませんか……………」

「シモン、何も無いと言うことは、良いことだから滅多なことを言うものじゃ……………」

《ビーツ、ビーツ、ビーツ!!》

不意に、サイレンが鳴り響いたと思うと、エイミーさんを筆頭にクルー達は全員プロの顔に戻る。

「座標N106に正体不明の魔力反応を確認。データバンク照合、該当なし。ロストロギアと思われませす！」

「N106・・・場所は？」

「第97管理外世界で間違いありません！」

不謹慎だとは思いつけど、待望の事件がやってきたみたいね。

「自動航行装置解除、機関最大！針路変更、第97管理外世界！現地名称『地球』へ！！」

「了解！機関最大、進路変更！！」

「アースラ、全速前進！！」

私たちは時空管理局。全ての次元世界の、平和と安全を守り、影から見守る組織なのだから・・・。

【Side over】

【Side Alf】

ジュエルシードを押さえ込むためにフェイトがあんな無茶をする羽目になったのも、あのリョウトとか言う奴のせいだ。

アジトに戻ったあたしは、怪我をしたフェイトの手当てに取りかかる。

脱脂綿で血を拭き取ってガーゼをあてがい、テープと包帯で固定する。

あたしの主であり、相棒でもある彼女の小さい両手は、白い布でほとんども隠れてしまい、かなり痛々しい。

「ごめんよ、フェイト。あたしがもつと周りをよく見て戦えば、こんな事には・・・!」

「いいよ、過ぎたことだし。それに、ジュエルシードも確保できて結果オーライだから」

「でも・・・」

精神で繋がっているあたしにはわかる。フェイトは明らかに無理をしている。

どんなに頑張ったところで、『あの女』が振り向くことは、無いのだから・・・。

「この位、どうと言うこと無いから。それより、夕飯にしよう。お腹空いちやった」

「ああ、そうだね」

あたしはアルフ。フェイト・テストロッサの使い魔であり、相棒。彼女はあたしが守る。たとえ何が起きようとも、あたしがこの手で・・・!!

【Side over】

【Side Linnis】

「・・・はあ・・・」

帰ってきてからというものの、リョウトは何だか元気がないように思えます。

普段からテンションが高いとは言えない人ですが、それを差し引い

てもかなり沈んでいるような感じがします。

「何か悩み事ですか、リヨウト？」

とりあえず、本人しか真相は知らないと思うので、私は聞いてみることにします。

「リニスか。・・・ちよつとな」

聞いたところ、彼の悩みのタネはなのはさん達と協力して行っているジュエルシード集めにあるそうです。

彼となのはさん以外に、ジュエルシードを集めている魔導師が存在したことを・・・。

「そうですね、そんなことが」

「今更になって、俺は正しいのか疑問に思えてくる。もしかしたら、そいつの目的が正しくて、俺達は間違っているような気がしてならないんだ・・・。」

「良いじゃないですか、それで」

「えっ・・・？」

「世界の数だけ、人がいて、人の数だけ、考え方があある。リヨウトはリヨウトが正しいと思っただ道を、がむしゃらに突き進めば良いんですよ」

「『がむしゃらに』、か・・・。」

そう言っつて彼はまた、夜空を見上げる。

春先、それも都市部としては珍しく、澄んだ星空だった。

「ん、話したら何だかスッキリした。サンキューな、リニス」

「どういたしまして。私でよければ、何時でも相談に乗りますから、

安心して下さいね」

プレシア。私は今、使い魔としての第二の人生を歩んでいます。
今度の主人は無愛想で、不器用で、それでいてスイーツが好きで、
優しい人です……。

【Side over】

第六話・それぞれの思い（後書き）

【お知らせ】

デバイス設定に サソード を追加しました。

第七話：そして、アースラへ。（前書き）

チート化完了。そんな第七話です。

第七話：そして、アースラへ。

【Side Ryou to】

ある日の夕方。

ユーノから連絡を受けた俺は自転車を走らせ、臨海公園に向かう。来てみると既に戦闘は始まっていたらしく、なのはとフェイト、アルフが某格闘ゲームに出てくる木偶人形のような姿を取った思念体と戦っていた。

「来い、カブト！」

《はい！！》

ゼクトレシーバーの赤いボタンを押し、カブトとその接続ツール、ゼクトフォームを呼び出して彼女を右手でキャッチする。

「変身！！！」

《Henshin》

そして、走りながら彼女をベルトのバックル部分に装着し、マスクドフォームに変身すると同時にデバイスホーンを前にずらす。

「キャストオフ！！！」

《Cast Off・Change・Beetle》

ライダーフォームとなって身軽になった俺は、チャージボタンを1、2の順に押し込んでホーンをマスクドフォームの位置に戻す。

《One・Two》

「ライダーエッジ!!」
《R i d e r E d g e》

ジャケットホーンで増幅された魔力がカブトクナイガンに流し込まれ、その作用で刃が赤熱化する。

「おりやつ!!」

最初に目に付いた思念体をクナイガンで斬りつける。
脇腹を斬り裂かた相手は苦しむような動きを見せ、爆散する。

「オラオラオラ!!」

そして、テンポよく他の思念体もクナイガンで斬っていき、残っているのも、なのはの砲撃やフェイトの斬撃によって次々と撃破されていく。

最後の一体がアルフのパンチで砕け散ったその時だった。
その場に残っていた思念体の残骸が集合していき、まるでおとぎ話にでも出てきそうな人面樹が出来上がる。

「ハッ、サイズがデカくなったところで!!」

余裕をかましたアルフが思念体に殴りかかり、俺達は射撃魔法を放つ。だが・・・

「なにっ!?!」

「そんな!」

「嘘だろ・・・」

彼女の拳も、魔力の弾丸も、本体に届く前に見えない壁によって阻

まれてしまう。

どうやら、バリアを張って守りに徹するつもりようだ。

「さて、あの厄介なバリアをどうやって破るか………」

根を伸ばしてきたり、葉を手裏剣のように飛ばしてきたりと攻撃自体は地味。むしろ大きいだけで大したことがない。

しかし、奴の張るバリアにクナイガンは通じず、フェイトの斬撃はもちろん、なのはの砲撃でも破れる気配がない。

「何か方法はないのかい!？」

「それについてだが、俺に考えがある。みんな、ちょっと耳を貸してくれ」

「こうかい？」

「ん」

「え？」

寄ってきた三人に、俺は自分の考えた作戦を伝える。

「確かにその方法ならバリアが破れそうだけど………」

「そのためにはフェイト、お前の協力が不可欠だ。頼む、手を貸してくれ」

「………」

フェイトはしばらく考える素振りを見せ、

「ん、わかった……」

そして頷く。どうやら了解してくれたようだ。

「じゃあ、手筈通りに頼むぜ！」

「うん！」

「OK！」

「わかった」

「了解だよ！」

作戦というのはこうだ。

まず、動きの素早いフェイトが相手の注意を惹きつけ、攻撃の起点となる枝や根を切り落とす。

次に、アルフとユーノがバインド魔法で相手を拘束、さらに反撃の手を封じ込める。

そして最後に、なのはのデイバインバスターを撃ち込んで、そこにできた隙間に俺のライダーキックを叩き込むと言うものだ。

「・・・いくよ、バルディッシュ」

《Yes sir》

加速したフェイトが思念体の周囲を飛び回る。

それを捕らえようと、人面樹は葉を飛ばし、根を伸ばしてくるが素早い動きに対応できていない。

《Scythe form, set up》

「アークセイバー！」

黄金の魔力刃が放たれ、次々と枝や根を切り落としていく。

「今だ、チェーンバインド！！」

「ストラグルバインド！！」

間髪を入れずにユーノとアルフがバインド魔法を発動させる。

翡翠色と朱色の魔力の鎖が人面樹の幹に絡みつき、その動きを封じ込める。

「なのは、リョウト、今だ!!」

「オウ!!」

「うん!!」

なのははレイジングハートを構え、俺はカブトの脚に付いているチャージボタンを1、2、3の順に押し、デバイスホーンをマスクドフォームの位置に戻す。

《One , Two , Three》

「ライダーキック!!」

《Rider Kick》

「デイベイン・・・!!」

《・・・Buster》

「シュート!!」

「おりゃああああ!!」

渾身の砲撃がバリアを突き破り、必殺の跳び蹴りが思念体にクリーンヒットする。

ジュエルシードの魔力で硬質化しているとはいえ、木であることに変わりはなく、人面樹はあっさりと砕け散り、安定状態になったジュエルシードのみが残された。

「・・・」

「待つて!!」

それを封印しようとしたフェイトを、なのはは呼び止めた。

「フェイトちゃん、フェイトちゃんは、どうしてジュエルシードを集めるの？」

「……………」

彼女は答えず、代わりにバルディッシュを構える。

「勝てば、話すことも考える……………」

「そう……………なら！」

なのはもレイジングハートを構え、臨戦態勢を取る。

「今度という今度こそ、お話聞かせてもらおうよ！」

こりゃ、邪魔しない方が良いかな

決闘の雰囲気を感じ取った俺は、カブトを腰のゼクトフォルドから取り外して帰らせ、ユーノらと共に傍観を決め込んだ。

太陽が水平線に姿を消し、星が輝き出しそんな空をバックに、対峙する二人の魔法少女。

しばしの静寂、そして沈黙。一番星が煌めいたその時だった。

「……………!!」

「……………!!」

二人が動いたのは、ほぼ同時だった。

クロックアップほどでは無いにせよ、かなりのスピードで距離を詰めていく両者。

そして、中間地点でぶつかり合おうとした次の瞬間だった。

「ストップだ!!」

黒一色のバリアジャケットに身を包んだ少年がいきなり現れ、バル
ディッシュを左手に持った杖で、レイジングハートを右手で受け止
めていた。

離れてみていた俺はもちろん驚いたが、実際に攻撃を止められた二
人の心境は想像に難くなかった。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！直ちに武装を解除し、
事情を聞かせて貰うぞ！」

「おい、ちよつと待てよ！！」

クロノ、もとい時空管理局の介入は、第一期での重要なターニング
ポイントである。

頭では解ってはいたが、いざ実際に目の前にしてみると色々な感情
が俺の中で爆発して、いてもたってもいられなくなった。

「執務官だか試験官だか知らねーが、管理局つてのは一対一の勝負
に横槍を入れるような、野暮な連中の集まりなのか、ああ！？」

「流れ弾が掠りでもしてみろ！ここのら一帯は吹き飛ぶぞ！！」

「そいつは百も承知だつての！だからこそ、ガチンコ勝負でどっち
が得るかを決めようとしていたんじゃないかねえか！！」

「そうか・・・なら」

そう言つてクロノは手に持っていた杖 彼のデバイス を構えて言
い放つ。

「実力で、わかってもらうしかないようだ」

「ハッ、結局それがよ！」

「リョウト、相手は管理局員だ！戦うべきじゃ・・・！」

「お婆ちゃんは言っていた・・・」

止めようとしたユーノに、俺は言う。

「人の価値を決めるのは、着ている服じゃない。生まれ持っている魂だ」、ってな!」

俺はゼクトレシーバーの、今まで一度も押したことが無かった青いボタンを押す。

「来い、ガタツク!」

《はい!がんばっちゃうぞ!》

俺は転送魔法を使って飛んできたガタツクを、左手でキャッチする。

「変身!」

《Henshin》

そして、ゼクトフォルドのバツクル部分に彼女を接続する。

内包されたバリアジャケットが俺の魔力を使って展開され、蛹をモチーフとしたガタツク・マスクドフォームに変身が完了した。

手始めに俺は、ガタツクの特異なシルエットを形作る両肩の砲、ガタツクバルカンの狙いをクロノに定める。

「喰らえつ!」

《Fire》

砲口に、俺の魔力の色である真紅のミッド式魔方阵が現れ、そこから射撃魔法を連射する。

吐き出された無数の魔力弾は一寸違わずクロノに直撃したかに見えるた。

しかし、着弾点にいたクロノはほぼ無傷だった。

どうやら、全て防御魔法で防いだらしい。

「今のはちよつと、危なかつたな・・・」

「腐つても枯れても、執務官の名は伊達じゃない、つてか？」

「次はこちらの番だ！」

クロノは彼のデバイス（確か、S2Uとか言つたか？）の先端に魔力を収束させ、それをこちらに向ける。

《ブレイズキャノン》

「ファイアっ！！」

「ちいっ！」

空色の魔力の奔流が、俺に迫る。

咄嗟に俺は両腕を交差させ、真つ向からその防御を試みる。

今までに経験したことのない衝撃が俺の両腕に襲いかかり、数センチほど後退する。

「何の、これしき！！」

しかし、俺はそれをバリアジャケットの効果で強化された腕力と、気合いではね除けた。

「んなつ・・・!？」

「砲撃魔法も防ぐとは・・・すげえな」

《うーん、カブトお姉ちゃんが、『あたしはいいところ取り』つて、言つてたよ!》

「『いいところ取り』、ね・・・」

気になつた俺は、ホロスクリンでスペック表を出す。

攻撃力はサソード、防御力はドレイク、性能バランスはカブトと同等。

瞬発力はザビーに若干劣るものの、それだけに目をつぶれば、最強とも言える怪物的スペックだった。

「半分チートだな・・・これは。ところで、使い方はどうすれば良いんだ？」

「えっとー、カブトお姉ちゃんと同じで、デバイスホーンを開けば、キャストオフ。チャージボタンを1、2の順番で押せば、ライダースラッシュが使えるよ！」

「後の二つはカブトと同じか・・・」

そう言つて俺は、ガタツクの大顎 デバイスホーンの間指を入れ、上下に開く。

ガタツクバルカンの砲身部分と胸、両腕、頭の装甲がスライドし、浮き上がる。

「・・・・・・？」

「キャストオフ！」

《Cast Off》

そして、デバイスホーンを180度回転させる。

装甲が弾け飛び、それと同時に顔の両側に付いた大顎、ジャケットホーンが起立し、クワガタムシの様なシルエットを形作つた。

《Change Stag Beetle》

「さてと、第二ラウンドだ！」

「姿が変わつたところで！」

クロノは、今度は射撃魔法を連射してくる。

一見すると乱雑そうに見えるが、その実、避けられるような隙間はない完璧なパターン。

そう、『普通なら』避けられないが・・・今の俺には『避けられる』

「クロックアップ!」

《Crock Up》

俺はゼクトフォールドのサイドバツクルにある、スラップスイッチを叩く。

クロックアップが発動し、迫る魔力球の動きが止まる。

いや、正確には動いているのだが、流れる時間が違うため、その動きが極端に遅くなっている。

その間を、俺は悠々と歩いて通り抜ける。それでも、クロノの目には信じられない速度で移動しているように見えているだろう。

「オラッ!」

彼を間合いに捉えた俺は、相手の顔に右フックを叩き込む。

受ける体勢を取っていなかったクロノはそれをモロに喰らい、『ゆっくりと』吹っ飛んでいく。

だが、これで終わらせるつもりは無かった。

俺は彼の進路に先回りし、横蹴りで再び、今度は俺がいた方向に蹴り飛ばす。

そして、間髪を入れずに再び先回りし、チャージボタンを順番に押してデバイスホーンをマスクドフォームの位置に戻した。

《One, Two, Three》

「ライダーキック!」

《Rider Kick》

そして、ホーンを再び、ライダーフォームの位置に倒す。
俺のリンカーコアから発せられた魔力が、バリアジャケットの表面を伝わり、頭部のジャケットホーンに集中する。
そして、そこで増幅された魔力が俺の利き足に伝導する。

「はっ!！」

俺は助走を付けてジャンプし、

「せいやああああ!！」

必殺の飛び回し蹴りをお見舞いする。

飛んできた勢いに加え、俺自身のキックの威力も加わるのだから、非殺傷設定でも相当痛いだろう。

喰らったクロノは地面に叩きつけられ、何回か転がって動かなくなる。

「…………やべえ、ちょっとやり過ぎたか…………?」

《Crock Over》

「おおい、大丈夫か!？」

俺はすぐさまクロノの元に駆け寄ろうとする。だが……

「使用が禁止されている時間系の魔法に……ロストロギアのあるところでの戦闘行為、加えて公務執行妨害のオマケ付き…………法律違反のオンパレードだな……」

(たぶん)骨まで響くダメージを受けたにもかかわらず、クロノは立ち上がった。

「どうやら、僕も本気でやる必要があるみたいだ……！」
「良いぜえ、第三ラウンドか？望むところだ！」

俺とクロノは、互いに走って距離を詰める。

互いの距離が詰まったところで、俺は拳を振り上げ、クロノはデバイスで殴ろうとする。

その時だった。

「はい、そこまで！」

「！?!?!?!」

俺達の間、翡翠色の髪に、紺色の制服を着込んだ女性がいきなり現れた。

「時空管理局、？級次元航行戦艦『アースラ』艦長、リンディ・ハラウンです。すぐに矛を収めてください」

「……！！！」

彼女、リンディさんを見た俺は思った。

クロノと比べて、品格が違いすぎる。その場にいるだけで、周りの空気が厳粛なものになるような気がした。

「……わかった」

俺はガタツクをゼクトフォールドから取り外す。

「先ずはこの場を借りて、部下の非礼をお詫びします」

「……いや、こつちも感情的になりすぎていました。すみません……」

「立ち話も何ですから、艦の方に案内します。あなた達も、それで

良いですね」

「はい」

「わかりました」

かくして、俺達は一期だけでなく、それ以降も重要な鍵を握ることとなる組織、时空管理局と接触した。

ミッドに居た頃は、こういう事になるなんて、微塵にも思っていなかったが……。

思えば、カブト達を使うようになったのが第一のターニングポイントとすると、これが第二のターニングポイントと言えるのかもしれない。

第七話：そして、アースラへ。（後書き）

こうしてみると、いかにワームが厄介で、マスクドライダーシステムの凄さがわかる気がします。

それと、地の文には書いてませんが、フェイトとアルフはリョウトとクロノが戦っている隙に逃げたと言っていることになっています。つたなくて申し訳ないです。 m (| |) m

第八話：俺の、決意。（前書き）

いよいよ物語はクロックアップ！
そんな第八話です。

第八話：俺の、決意。

【Side Ryou to】

リンディさんの案内で、アースラへとやってきた俺達。
『支度をする』と言って艦の奥へ引っ込んだ彼女が変わって、クロ
ノが俺達をエスコートしていた。

「おお・・・すげえな」

「これでも、就役からだいぶ経っているから、最新鋭艦と比べると
見劣りするけどね」

「それよりよ・・・」

天井などを見ていた俺は、ここでクロノの方を見やる。

「戦闘から離れたんだから、バリアジャケットくらい解除したらど
うだ？」

「僕にとつてはこれが制服なんだ。気を悪くしたなら謝罪する」

「ったく・・・お前、絶対友達少ないだろ？」

「こつという性分なんだ。それより、ユーノとか言っただけ？そろそ
ろ元の姿に戻ったらどうだ？」

「それもそうだね・・・よつと」

ユーノは乗っていたなのはの肩から降りると、その場で宙返りする。
彼の体が光に包まれ、それは徐々に大きくなっていく。

そして、光が消えたところで元の少年の姿となって立ち上がった。

「ふう……。二人にこの姿を見せるのは、久しぶりだったね」

「ふええっ!？」

「ほほう……」

俺はアニメで見たことがあるのでさほど驚かなかったが、なのはは結構驚いたような表情を見せた。

「あー、ユーノ。俺の記憶が正しければ、お前は今日までずっとフレットのままだったぞ……?」

「え……ホント……?」

「こんな時に嘘をついてどうする?」

「……」

あー、なのはが赤面している。頭から湯気でも出そうなくらいに。

今彼女の頭の上にヤカンを置いたら、お湯が沸くんじゃないかな……?

「ユ……ユーノ君……後で……その……お話聞かせて!」

「う、うん……」

とりあえず、しばらくこの話題には触れないでおこう……。

その後、俺達は艦内にある応接室へ通された。

一段高くなっている部屋の中央には、赤い敷物が敷かれ、そこには野立ての用意が調っていた。

ただ、違和感がものすごい仕事ぶりを見せている。

SFチックな艦の内装の中では明らかに浮いていた。

「とりあえず、座ってくれ。艦長を待たせるわけにはいかないからな」

俺達はクロノに促されるまま、靴を脱いで上がる。

「では改めまして。ようこそ、アースラへ。艦長のリンディです」

「ご丁寧にどうも。俺はリョウト・クラインです」

「高町なのはです。はじめまして」

「さて、今日来てもらったのは他でもありません。あなた達が自主回収しているロストロギア、ジュエルシードの事です」

「あ、はい！質問良いですか？」

本題に入りかけたところで、なのはが挙手する。

「その、『ロストロギア』って、何ですか・・・？」

「それは僕が説明しよう」

ここで、クロノが説明を始めた。

「君たちの住んでいる地球以外に、幾つもの世界、次元世界が存在する。僕たちはその内の一つ、ミッドチルダから来た」

「要するに、『平行宇宙理論』を凄まじくスケールアップしたみたいなもんか？」

「簡単に言うと、そうだ。そして、その中には技術の過剰発達により、世界そのものを滅ぼしてしまうような兵器や道具が作られる事がある。」

ロストロギアというのは、そうやって滅びた世界の、言わば忘れ形見みたいなものだ。

『とても危険な』と言う形容詞を付け加えなければならぬような

代物ばかりの」

「??????」

アニメで知っていた俺は大体解ったが、なのはの方かというと、頭の処理能力をオーバーしているらしく、内容に関してはほとんどチンパンカンパンと言ったところだった。

「早い話が、使われても、使われなくても危険な物だ。僕たちはそれを回収するために駆けずり回っている」

「……………」

ただ、事の重大さは理解できたらしく、表情は深刻だった。

「即座に行動を起こしてくれたことには、感謝している。だが、ここから先は僕たちに任せてほしい。だから……………」

「チヨイ待ち」

ここで俺は、クロノの発言に割って入る。

「クロノとか言ったか。お前は、『速さの次元が違う敵』に勝てるか？」

「その次元がどの程度かもよるが、勝てないこともない」

「言い方を変えよう。お前がパンチ一発撃ち込む間に、そいつはパンチを百発くらい余裕で撃ち込む速さで動ける。そいつには、どう対処する？速攻とかは無しの方向でだ」

「それは……………」

クロノは少し考える様子を見せ、答えを述べる。

「畏を張って、敵の動きを制限させる。僕なら、地雷式のバインド

を設置するね」

「・・・お前、死んだな」

「は・・・？」

「畏なんて無意味だ。極端な話、発動して効果を発揮するまでに逃げられる。」

「それどころか、張る前に喉笛を掻き切られて、お前は二階級特進だつて言いたいんだよ」

「んなつ・・・!？」

「嘘だと思っなら、試してみるか？最も、お前は一度経験しているハズだが・・・」

「リヨウトさん、貴方の言っているのは、『クロックアップ』のことですね？」

「ご明察です」

ここで俺はリンディさんからクロックアップについて説明を受けた。リンカーコアから供給された魔力は、ゼクターデバイス本体で増幅され、それを空气中に放出。

その魔力で時間の流れに干渉し、自分の中を流れる時間、主観時間と自分の周りを流れる時間、客観時間に『ズレ』を生じさせ、その『ズレ』を利用して超高速、もとい超次元移動するための魔法、とのことだ。

「簡単に言うと、次元航行艦や転送用ポートのシステムを手のひらサイズにまで縮小したのが、ゼクターデバイス。と、私は聞いています」

「なるほど・・・」

「『なるほど・・・』って、知らなかったのか君は？」

「カブトから簡単な説明を受けたつきりだ。親父も仕事の話は全然しなかったし」

「『親父』・・・？」

「名前はアルフレッド・クライン、管理局で執務官をやった。．．．．．三年くらい前に死んだケドよ．．．．．」
「．．．．．まさか、『アレ』を調べていて．．．．．?」
「．．．．．?」

親父の事を言った瞬間、リンディさんの表情が僅かに険しくなった気がするが．．．気のせいだろう。

「とにかく、回収を続けるのなら私達も協力は惜しみません」
「本当ですか!？」

嬉しそうな表情をするのはを見て、リンディさんは続ける。

「ただし、幾つか条件があります。先ず一つは、しばらくの間、貴方達をアースラの預かりとします。これは危険を伴うのが大半を占めるのが主な理由です。

そしてもう一つ、こちらの指示には従ってもらいます」

「それって暗に、『管理局員になれ』って意味ですか？」

「現地協力員として、だけどね」

「．．．．．?」

「今すぐに答えは求めていません。よく考えて、それから．．．」

「あのっ．．．!」

と、ここでなのはが切り出した。

「あの子は．．．フェイトちゃんは、どうなるんですか!？」

「『フェイトちゃん』．．．?」

「俺らに対抗して、ジュエルシードを集めてる女の子です。．．．目的まではわかりませんが」

「．．．それも調査してみる必要があるそうね。クロノ執務官、お

願いできるかしら？」

「了解しました」

この後、俺たちはクロノに連れられて元いた臨海公園へと戻り、そのまま解散という運びになった。
重要な選択を土産に……………。

「そうですね、管理局が……………」

なのはと別れ、家に戻った俺はリニスに今日あった事を話した。

「ああ。事を嗅ぎ付けたこと自体は、偶然だろうがな。ところでリニス、彼女は……………プレシアは、一体どんな人物なんだ？」

「どんな、ですか……………。そうですね、一言で言うならば、

『良くも悪くも一途な人』、でしょうか？」

「一途な、ね……………」

確かに言われてみれば、思い当たる節も多々ある。

俺の記憶が正しければ、彼女には娘が『もう一人いた』。

名前は……………『アリシア・テストロッサ』。プレシアの『本当の』娘。

フェイトは彼女のクローン、それも、記憶まで受け継いだ分身のようなものだった。

アニメの中で、プレシアがフェイトを虐待するシーンがあったが、あれはアリシアに対する愛情の裏返しだったのだろう。

『姿と記憶は全く同じ、けれど別人』。これがどれほど恐ろしいことか、俺には想像が付かないが、プレシアのあの行動を見れば、不思議と納得がいく。

「もしかしたら・・・苦しんでいるのかもな」

「え・・・？」

「アリシアと言う『夢』と、フェイトと言う『現実』の狭間で、彼女は揺れ動いている。なまじ、『夢』が綺麗だっただけに、な・・・。お婆ちゃんも言っていた。『朝起きるには、優しい目覚ましだけでなく、キツイ目覚ましも必要だ』、ってな。何れプレシアとは対峙することになるかもしれない。そのためにも、俺は管理局に協力する。しばらく、留守番を頼めるか？」

「お安いご用です。私は、リョウトの使い魔ですから」

腹は決まった。後は、突き進むのみだ・・・！

それから2、3日後。俺は学校が終わった後、すぐさまリンディさんとコンタクトを取り、人目に付きにくい公園に来てもらった。用件はもちろん、例の『アレ』だ。

「それで、お話というのは？」

「もちろん、管理局に協力するか否か、です。答えは・・・」

そして、俺は真剣な眼差しで言った。

「微力ながら、協力します」

「ありがとう。正直なところ、アースラの戦力だけでは不安要素も多かったから、うれしいわ。・・・さてと、そろそろ来る頃かしら？」

「？」

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・！」

俺が頭に疑問符を浮かべていると、遠くからなのはが走ってきた。

「すいま……せん……。遅れました……」

「???」

「実を言うと、昨日なのはさんの家に行って、お家の方とよく話し合ったの。そしたら意気投合しちゃって、そのままとん拍子というわけ」

「……………。それよりなのは、良いのか？」

「何が？」

「……お前は俺が生まれた世界の人間じゃない、れっきとした『地球人』だ。極端な話、管理局に協力するってのは、地球人としての日常を投げ捨てるのと同義だ。だから……………」

「日常ならもう、ほとんど捨てちゃった」

「え……………」

「リョウト君と一緒にジュエルシードを集め始めたときから……ううん、ユーノ君や、レイジングハートと出会ったその時にはもう、リョウト君の言う『日常』は、たぶん投げ捨てられていたんだと思う。それに、これは私が考えて出した、答えだから！」

『9歳とは思えないくらい、精神面が大人びている』。

無印からA・Sにかけてのなのは、フェイト、はやてを称した言葉だが、今更ながらその意味が分かった気がする。

どうやら、覚悟は既に出来ているようだった。

「ふつ……聞くまでも無かった、ってわけか。つーわけでリンデ伊さん、二人合わせて、ご厄介になります」

「ありがとう、二人とも。それじゃあ、早速アースラの中を案内しないかね」

こうして俺達二人は、時空管理局に協力して、ジュエルシードを集めることになった。

さてはて、俺、『リョウト・クライン』と言う原作にはなかった要素が、果たしてどんな嵐を巻き起こすか、俺自身にも想像が付かないな……。

第八話：俺の、決意。（後書き）

デバイス設定に「ガタツク」を追加しました。

第九話：パーフェクト・ハーモニー（前書き）

今回はちょっと短め。

そんな、第九話です。（^^;）

第九話：パーフェクト・ハーモニー

それから数日、ジュエルシード集めは順調に進んでいた。

今までは、ほぼしらみつぶしに探すか、発動してから現場に駆けつけていたが、管理局のお陰でかなり正確な位置が割り出せるようになり、一日に二個や三個も回収できるときもあった。

そして今日は、不死鳥のような姿を取った思念体と俺達は激闘を繰り広げていた。

「リョウト、今だ!!」

「オウ!!」

ユーノが相手をバインドで絡め取り、隙を作ってくれた。

俺はそれを見て、両肩のガタツクダブルキャリバーを抜き放ち、鏢にあたる部分を支点にして交差させた。

「ライダーカッティング!!」

《Rider Cutting》

「おりゃあああ!!」

そして、強化された脚力にものを言わせて跳躍し、不死鳥の首の部分を挟み斬った。

・・・こりゃ、人間相手には非殺傷でも使いにくいな・・・。
胴体と泣き別れになった首は消滅するが、思念体は羽手裏剣を飛ばして最後の抵抗を試みる。

しかし、それと同時に桜色の帯が相手を包み込んだ。

「リリカル、マジカル、ジュエルシード、シリアル??、封印!!」

《Sealing》

なのは魔法によって思念体は消滅し、ジュエルシードの封印に成功する。

《みんなお疲れ！帰ったら、美味しいスイーツ、クロノくんがご馳走してくれるってさ》

通信機としての機能が追加されたゼクトレシーバーから、アースラの戦術オペレーターであるエイミィさんから、労いの通信が入った。

《・・・エイミィ、そこでどうして僕の名前が出てくるんだ・・・？》

《細かいことを気にしてたら、ビッグになれないよ？精神的にも、『肉体的』にも》

《細かいから気にするんだ！だいたい・・・》

「何というか、彼女とクロの字は時々まるで漫才マナみたいな会話をするときがある。確か、訓練校時代の同期という設定だったが、そのあたりはどうなのだろうか？

「あ、じゃあチヨコパフエ頼むわ、クロの字」

《君も『クロの字』って呼ぶな！！》

なのはと背丈が同じせいか、彼には今ひとつ威厳というものが足りない気がする。

これも、転生してから発見したことの一つだ。

「そう言えば……」

その日の昼休み。学校でふと、なのはが呟いた。

「んあ？」

「フェイトちゃんは……どうしてるんだろ？」

「そう言えば、最近出くわさないな……」

言われてみると、フェイトと戦う機会が目に見えて減ってきていた。俺の勝手な推測だが、管理局との衝突を避けているのではないだろうか？

「今頃、どこかでジュエルシードを探しているのかな……？」

「まあ、出てきたら考えようぜ。その事はよ」

「うん……」

口ではそう言った俺だが、一つ気がかりな点があった。

仮に、今の時点が無印の第十話くらいとするなら、タイミン格的にそろそろ『あのイベント』が起こるかもしれないからだ。

たぶん今頃、フェイトは時の庭園だろうか……。くそっ、助けに行けないのが歯痒いぜ……！

【Side over】

【Side Fate】

私達は今、活動している街の沖合、その上空にいた。

「ねえ、フェイト。このあたりで間違いないのかい？」

「考えられる可能性は全て試したから、間違いない」
「……………」

「私は、悪い子なのだろうか？」腕に残る痣を気にしていたら、ふと浮かんだ。

アルフは「あんな風に」言っていたけど、あの時はたまたま、母さんは機嫌が悪かったただけだと、私は思っている。

そして同時に、もうのんびりしていられないことも、わかっている。

「……………アルカス・クルタス・エイギアス……………煌めきたる天神よ。失われし声に耳を傾け給え。バルエル・ザルエル・ブラウゼル……………」

私は気持ちを切り替えて、以前も使ったことのある探知魔法の使用準備をする。

「無垢なる調よ、我が手によりて現れ給え。アルカス・クルタス・エイギアス……………」

私の足下に、私の魔力の色である金色の魔法陣が現れて、その周囲から紫電がほとばしる。そして……………

「奏でよ、漸雷！サンダーシンフォニア！！」

私を中心に方々へ雷が落ち、ピンポイントで魔力が流し込まれる。

そして、沖合の四力所にそれが着弾したその時、想定外の自体が起きた。

「……………なっ！」

込める魔力が強すぎたのが、ジュエルシードが四つ同時に発動し、巨大な水竜巻が巻き起こってしまった。

「こうなったら仕方がない・・・止めるよ、アルフ！」
「合点了解だよ!!」

反省するのは、後回し。今は、目の前の問題を、何とかするしかない!

【Side over】

【Side Ryou to】

久しぶりに現れたフェイトが、海上でジュエルシードを相手に戦っている。

その光景は、丁度アースラに来ていた俺達もモニター越しに目の当たりにしていた。

「すごい魔力量・・・!このまま行ったら、万が一抑えられたとしても、あの子が保たないよ!!」

そう言えばアースラ内のデータベースで見たことがあるが、行使する魔力の総量が多ければ多いほど、使用する魔導師の体に掛かる負担は比例して大きくなる。ましてや、それが20代どころか、10代にも満たない子供なら尚更だ。

本来なら今すぐにでも止めに入るべきなんだが・・・

「いや、このまま様子を見よう。ダウンしてくれば、確保もやりやすくなって一石二鳥だ」

出ましたよ、クロの字の超合理主義的発言。

まあ、確かに一理ある。けど、今の俺はこの物語の当事者の一人だ、黙って見過ごす訳にはいかない。

「……………!」

「……………!」

俺はなのはとアイコンタクトをとると、行動を開始した。

「高町なのは、勝手に出撃します!」

「あ、おい。ったく、しゃあない……リョウト・クライン、なのはを止めてきまーす」

誰がどう見ても、棒読みなセリフを言いながら、俺は一足先に現場へ向かったなのはを追いかけていった。

「ぶおっ!?!」

「きゃあっ!?!」

現場を望む幹線道路に降り立った俺達は、いきなり水しぶきを頭から被ってしまう。

忘れてたぜ……ここが海に面してるってことを……………。

「相手は空中か……クソッ……!」

「リョウト君、ここは私に任せて!!」

「……頼む、なのは!」

あの時の不死鳥モドキみたいに地表近くをウロウロするタイプなら

俺でも何とかあったが、今回は海上、それも陸地からかなり離れている。これではドレイクでも手が出にくい。そう思っていたその時だった。

「グルル・・・」

俺の背後に、人と昆虫の蛹を足したような異形 サナギ態のワームみたいな奴らが突然現れた。それも一体だけではない。

「フシヤアア・・・」

「グルルルル・・・」

さらにもう二体、サナギ態ワームみたいな・・・もう良い、ワームだ。そいつらが降り立ったのだ。

「ったく、楽はさせてくれそうにねえな・・・。ザビー、来い!!」

《またですか? いい加減にして下さいませ・・・》

「そう言っときながら、結局来てるじゃねえか」

《べつ、別にあなたの為ではありません事よ!?? つけ上がらにゃい・

・つけ上がらないことね!!》

「・・・変身」

《・・・Henshin》

・・・セリフを囁むデバイスって・・・色んな意味で前代未聞だぞ・・・?

「考えるのは止めにするか・・・。セイツ!!」

気を取り直して、ザビーに変身した俺は飛びかかってきたワームを躲し、左ストレートで相手を吹っ飛ばす。

サナギ体は例えるならばシヨッカー戦闘員に近く、数は多いが戦闘力は低い。マスクドフォームでも楽勝だな、こりゃ……

「シャツッ!!」

「痛!?!この野郎!!」

つて、背中に一撃もらっちゃった……。油断大敵だな。

「オラアッ!!」

渾身の右ストレートがワームの体を貫き、緑色の炎を上げて爆散したその時だった。

三体いた内の一体の体色が徐々に茶色く変色したかと思うと、表皮が背中から割れ、中からナナフシのような成虫態 ファスミダワームに変化した。

「ちよっ……。初めて見るタイプだな、こりゃ……!!」

初めて見るタイプのワームだが、考えるのは後回しだ。

相手の繰り出してくる攻撃を回避しつつ、ザビーのデバイスウィングを頭側に倒し、装甲のスライドが完了すると同時に本体を180度回転させた。

「キャスト・オフ!!」

《Cast Off・Change Wasp》

「クロックアップ!!」

《Crock Up》

ライダーフォームに変身すると同時に、相手がクロックアップを発動したので、俺もクロックアップで追いつがる。

ファスミダワームはナナフシならではの細身の体を活かし、両腕を

鞭のようにしならせて打ち付けてくる。

そう言えば、『ムチは、銃を除くと全ての武器の中で一番痛い』とかなんとかどつかのマンガで言っていた気がするが、今ならそれが分かる。

「シャツッ!」

「つと!」

咄嗟に右腕の一撃を回避したが、その外れた一撃が路面のアスファルトにひびを入れたのだ。防御力に不安のあるザビーで何発保つか・・・。

《この程度、恐れるまでもありませんわ!私の力、見せて差し上げますことよ!》

「アホめかせ!戦っているのは俺なんだぞ!」

《何を言っていますの!?!シャドウの隊長にして、ザビーの資格者はこの私ですわ!》

「シャドウ?お前、ここはZECTじゃないぞ!」

《・・・あら?私は・・・何を・・・?》

いきなりザビーが変なことを言い出した。

この世界にZECTは存在しないはず・・・なのに何故、アイツはその精鋭部隊である『シャドウ』の名を出してきたのだろうか・・・

「とにかく、話は後だ。さっさと終わらせるぞ!」

《私に命令しないでもらえる?》

俺は一足飛びに相手との距離を詰め、左腕のデバイスニードルで突きかかる。

対するファスミダワームは右のムチでそれをいなし、左のムチで薙ぎ払うが、俺は寸でのところで回避する。そしてその一撃は、クロツクアップに対応できずに棒立ちになっていた一体のサナギワームが真つ二つとなる。

「ご愁傷様、つて・・・な!!」

「!!!!」

一瞬の隙を突いて、渾身の右アッパーを喰らわせ、ローリングソバツトで吹っ飛ばす。

「ライダーステイング!!」

《R i d e r S t i n g》

そして、本体のチャージボタンを押し、瞬時に間合いを縮めて必殺の一撃をお見舞いした。

魔力を直接体内に流し込まれたファスミダワームは二、三步後ずさると、その場に倒れて爆散した。

《C r o c k O v e r》

クロツクアップが解除されると同時に、ユーノとアルフのチェインバインドが水竜巻を捉える。どうやら、向こうも大詰めらしい。

「一気に封印するよ!!」

「わかった・・・!!」

「「せーの、せつ!!」」

なのはとフェイトが持つデバイスから、それぞれ同時に光の帯が現れて水竜巻に突き刺さる。そして・・・

「リリカル！マジカル！！」

「ジュエルシールド、シリアル？、？、？、？？！！！」

「封印！！！」

《《Sealing completed》》

全く同じタイミングで封印が完了する。それぞれ平等に、二つつつ収められた。

「ん、これぞパーフェクト・ハーモニー。即ち……」

《『完全調和』、ですわ！！》

「あ、テメエ、セリフ取りやがったな！」

《何の事かしら？私は私の思ったことを口にただけですわよ？》

「後で覚えとけよ……」

あの『兄貴』のセリフを言おうとしたら、ザビーに横から割り込まれた。

だが、何よりも気になるのはあの時、彼女が吐いた台詞だ。帰ったら、カブト達にも聞いてみるとしよう。

第九話：パーフェクト・ハーモニー（後書き）

カプト達ゼクターデバイスの人格について、ちょっとだけ伏線を張ってみました。

この秘密は、後々に明らかになると言っ事で・・・。

次回もお楽しみに！（ノノ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6972t/>

魔法少女リリカルなのは Z E C T

2011年12月30日02時46分発行